

とうきょう すくわくプログラム

令和6年3月



目次

I. とうきょう すくわくプログラムについて	3
II. 探究活動について	4
III. 令和5年度実践協力園における探究活動の事例	21
1. 自然	
自然との関わり（三光幼稚園）	22
柿の木（山谷かきのみ園）	26
オリーブ（聖愛幼稚園）	29
土・砂・泥（白金台幼稚園）	34
どろんこ（伊皿子坂保育園）	35
森歩き（ありんこ保育園）	36
石（若葉保育園）	37
2. 音	
音（太鼓）（亀戸第二保育園）	39
音（渋谷保育園）	43
音（福生杉ノ子保育園）	51
3. 光	
光（すみれ保育園）	53
4. 表現	
表現（絵本）（塩崎保育園）	59
5. 色	
色（山谷かきのみ園）	65
6. その他	
じごくとてんごく（西麻布保育園）	68
はかる（まんとみ幼稚園）	70
IV. 海外における探究活動の事例	74
V. 他園における探究活動の事例	77

とうきょう すくわくプログラムについて

「とうきょう すくわくプログラム」とはすべての乳幼児の「**伸びる・育つ(すくすく)**」と「**好奇心・探究心(わくわく)**」を応援する幼保共通のプログラムです。乳幼児の豊かな心の育ちをサポートするため、**主体的・協働的な探究活動**を通じて**幼児教育・保育の充実**を図ることを目的としています。

プログラムでは、各園の環境や強みを活かしながら、「光」「音」「植物」など各園が選択するテーマに沿って、乳幼児の興味・関心に応じた探究活動を実践することで、乳幼児の成長・発達をサポートしていきます。

子供は、日々の遊びの中で、**無意識に「探究」を積み重ねながら成長**

プログラムの活用によって、単なる「遊び」にとどまらず、**ねらいや意図をもって「探究」を実践し、「探究」プロセス全体の質を向上**

好奇心を抱くきっかけを**増やす**

思考のループを**広げる**

思考のループを**深める**

生涯発達の土台形成

多様な他者との関わりの中で、主体的に「探究」のプロセスを積み重ねることで、**意欲・自己肯定感・社会性等の非認知能力**を培う

令和5年度の実践協力園の実践を踏まえ、**探究活動の工夫や子供の好奇心・探究心を高めるヒント**を、具体的な活動事例とともに「とうきょう すくわくプログラム」として取りまとめました。

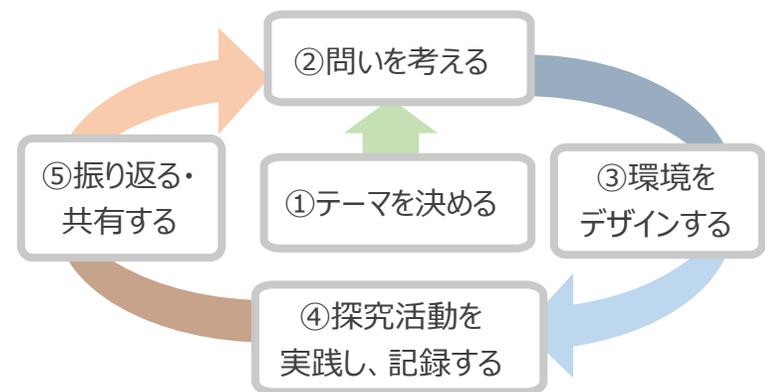
活動を通して何かができるようになる、といった結果や目的よりも、**子供たちが自ら興味を持ち、夢中になって遊び、発見する過程を積み重ねる**ことを重視しています。

活動内容はあらかじめ決まっているものではなく、子供たちの興味関心をもとに自由に作り上げていくものです。各園の環境や強み、すでに行っている活動などを活かしながら、探究活動に取り組んでみてください。

探究活動について

右図の①～⑤のプロセスが基本的な探究活動の流れとなります。

- ✓ 各園の環境や強みに応じたテーマを設定し、テーマに応じた素材や道具を準備することで**子供たちが遊び込める環境**を整えます。
- ✓ 子供たちは、子供同士や保育者との関わりの中で、**自ら興味をもって試し、考えながら「探究」を重ねていきます。**
- ✓ 保育者は子供の問いに対し、単に答えを与えるのではなく、声かけ等の関わりによって**一緒に「探究」を深めていきます。**また、活動を振り返り、子供の好奇心・探究心を更に促せるよう、探究活動のデザイン・実践を繰り返します。



◆「探究活動」に対する園の先生方の声

- ・ 決まった結果があるわけではなくて、ありのまま子供たちが感じて、**子供たちの中で自然にどんどん疑問が増えていく。**
- ・ 一般的な知識などではなく、ありのままの目の前にあるものを**子供たち自身が見て触って感じたものが、知識になる**ということが探究なのかなって感じた。
- ・ 探究をする時は周りが見えなかったり、聞こえなかったりするほど集中して、**答えを探っていき、わくわくして、気持ちが高まっていく。**人にやらされるというよりは、**自分からどんどんやりたいことをする。**
- ・ 自分でいろいろ見て触って、**それを感じたままに、そのまま表現していく。**普段の保育で得意・不得意があっても、**探究は得意・不得意関係なく、誰もが可能性を秘めている活動。**
- ・ 何をやっても**正解や不正解がない。**絵を描く活動においても、みんながみんな全然違う絵を書いたり、違う色を作ったりと、みんなが違うものを作っている。日々の保育では型にはめるといふか、一つのことをみんなと一緒にやっているが、探究活動では子供たちのいろんな特徴や個性などを引き出せる。

探究活動の流れ

⑤振り返る・共有する

記録をもとに、子供が何に関心を持ち、何を発見し、どのような表現をしていたかを振り返ることにより、子供の世界について改めて理解を深めるとともに、子供の探究をさらに深めるための新たな問いや環境のデザインを考えます。

必要に応じて、園の内外の保育者や保護者と探究のプロセスを共有します。

②問いを考える

テーマについて子供がどのような考えやイメージを持っているかを知るために、子供への問いを考えてください。子供がどのように答えるか想像しながら、問いを準備します。

①テーマを決める

活動の前にテーマを定めます。子供が何を好きか、何に関心を持っているか、子供をよく見て、子供の興味関心を深められそうなテーマを選んでください。

④探究活動を実践し、記録する

活動中、子供の言葉・表情・ジェスチャー等の多様な表現に耳を傾け、メモ・写真・映像等で記録します。

また、子供の好奇心・探究心を高められるよう声かけ等を行い、子供と一緒に活動を深めていきます。

③環境をデザインする

子供への問いをもとに、どのような環境であれば子供の興味関心を深められるかを考え、素材や道具を準備し、環境を整えます。

活動の流れ：①テーマを決める

活動の前にテーマを定めます。子供が何を好きか、何に関心を持っているか、子供をよく見て、子供の興味関心を深められそうなテーマを選んでください。

【テーマ設定の例】

- ✓ 子供たちが普段から**興味を持っているもの**
例：自然、石、泥遊び
- ✓ 生活の中で**身近なもの、日常的に触れるもの**
例：音、光、色
- ✓ 園の**強みや環境**を生かしたもの
例：園の特色である活動（太鼓など）
園のシンボルとなっているもの（オリーブ、柿の木）
- ✓ 園の**日々の活動や行事**など
例：読み聞かせ（絵本）、定期的な活動（森歩き）
発表会の劇（じごくとてんごく）



活動の流れ：②問いを考える

テーマについて子供がどのような考えやイメージを持っているかを知るために、子供への問いを考えてください。子供がどのように答えるか想像しながら、問いを準備します。

- ✓ テーマに関して、**子供たちが知っていることや考えていることを聞き出すための問い**を準備します。決まった知識を子供たちに教えるのではなく、子供なりの考えや理由を聞きながら、言葉、絵、ジェスチャーによる子供たちの表現を拾っていくことを目指します。
- ✓ テーマについて、**子供がどう捉えているのかを一緒に考える**ことが探究につながります。また、子供たちがテーマについてどのように考え、どのように理解していくのかに着目することで、「**大人が子供を探究する**」活動にもなります。

【問いかけの例】

- ・ テーマについて、子供たちが持っている考えやイメージを引き出します。

<例> 「○○ってなあに？」 「○○って見たことある？」 「○○って聞いたことある？」

- ・ 活動を重ねるにつれ、さらにテーマを深められるよう、前回の活動をふまえた問いを、次の活動のねらいとして設定します。

<例> ・ 「オリーブってなあに？」
⇒「オリーブの色と形をよく見てみよう」⇒「オリーブの木の下はどうなっている？」
・ 「音ってなあに？」
⇒「身体からどんな音がする？」⇒「心臓からはどんな音がする？」

活動の流れ：③環境をデザインする

子供への問いをもとに、どのような環境であれば子供の興味関心を深められるかを考え、素材や道具を準備し、環境を整えます。

例



✓ 様々な素材

子供が選んだり比べたりできるよう、異なる色や形、性質を持つものを準備します。見る、触る、味わう、匂いを嗅ぐ、音を聴く、など諸感覚を使いながら子供が興味を持って素材について知り、子供の表現を広げられるようなものを選びます。

例



✓ 画用紙

普段から使っている決まったサイズや形だけでなく、子供たちの考えや表現に合わせて素材を選べる環境を整えることで、子供たちの想像力が引き出されます。

・大きさや形

四角だけでなく、丸い紙、長いロール紙、模造紙などを使うことで、みんなで協力して一つの作品を作る、それぞれが描いた絵が自然と繋がっていくなど、活動の幅が広がります。

・材質、色

様々な色の紙、光の透過性や材質が異なる紙を使うことで、発色の違いや絵の雰囲気の違いが生まれます。

活動の流れ：③環境をデザインする

例

✓ 様々な画材

- ・マジックペン、クレヨン、絵の具など子供が使いたい道具を自由に選べるように準備します。
- ・三原色（赤・青・黄）のみの絵の具を使うことで、子供が自由に色を作り出すことができます。
- ・子供の表現を制限しないよう、絵の具などの素材を、ある程度自由に使える環境を整えることも重要です。



✓ 筆

本物の動物の毛で作られた筆（羊、馬、豚、たぬき、りすなど）を使うことで、子供たちが知っている動物をイメージしながら、筆と自分の関わりを感じ、道具がより身近に感じられるようになります。

✓ 透明の水入れ

筆を洗う水入れを透明なものにすることで、色の変化を見ることができます。水入れの中には偶然に色が変わっていくため、色の変化を知ったり、水入れにできた色からお気に入りの色を見つけるきっかけにもなります。

✓ みつろうクレヨン

ミツバチが作ったみつろうからできたクレヨンは、子供たちにとって身近なミツバチやはちみつとのつながりを感じられます。さらに、重ね塗りをする事で色が混ざるため、自由に色を作ることができます。

活動の流れ：③環境をデザインする

例



↑複数の種類の虫眼鏡



↑マイクروسコープとタブレットを使って葉の表面を拡大している様子

- ✓ 虫眼鏡
- ✓ マイクروسコープ

子供が見たいものに合わせ、道具を選べるように複数種類の道具を準備します。

例



- ✓ OHP（投影機）
- ✓ トレース台
- ✓ ライトテーブル

光を当てることで、いつもとは違った見方で物を見ることができます。

✓ 懐中電灯

興味を持ったものに光を当ててよく見てみたり、セロハンを貼って光の色を変え、色の重なりを楽しんだりすることもできます。

✓ プロジェクター

子供たちが描いた絵を投影することで、子供たちの想像の世界を全身で体感し、遊ぶことができます。また、光を利用して影遊びを楽しむことも可能です。

活動の流れ：④探究活動を実践し、記録する

テーマに関する問いと環境を準備し、探究活動を行います。子供の好奇心・探究心を高められるよう声かけ等を行い、子供と一緒に活動を深めていきます。

✓ 子供への声かけ

探究活動においては、正解や間違いはありません。子供たちがテーマについて向き合い考える過程そのものを重視し、子供たちが自ら探究し、安心して自分を表現できるような声かけをしていきます。

また、結果や成果物を求めるのではなく、テーマとする**素材そのものにじっくりと向き合ってみる**時間も大切です。

- ・子供たちの感覚について問いかける

<例>「どんな匂い?」「どんな形?」「触るとどんな感じがする?」「どんな音が聞こえる?」「どれが好き?」

- ・子供の姿を見守る

<例>

- ・園児Aが絵の具の活動の際、筆を洗う水の色が変わることに興味を持ち、水の色が変わることを楽しんでいました。そこで、好きなだけやらせてもらうことにしたところ、普段集中することが難しい子だったが、40分近く集中して楽しんでいました。これにより、色水遊びに満足し、絵の具は楽しいというイメージがついたからか、次の活動では、すんなりと絵を描く活動に集中していました。
- ・園児Bは普段から最初に周りの様子を見てから参加することが多いので、探究活動の際も本人の気持ちを待ったところ、しばらく他の子たちが楽しくやり始めているのを見たあと、自然と活動に混ざっていった。

<園の先生の声>

- ・子供たちに様々な体験をしてほしいとの思いから声をかけ、働きかけてしまうが、**見守り待つことの大切さを学んだ。**
- ・つい声かけをしたり、手助けをしてしまいがちだが、**あえて手を出さないことで子供たち自らがいろいろ考えていくことを実感した。**

活動の流れ：④探究活動を実践し、記録する

✓ グループに分けて活動する

クラスを複数のグループに分けて探究活動を行うことで、活動がさらに深まります。

<グループの分け方>

- 普段一緒に過ごしているグループで分ける
⇒自分の意見を言いやすく、相手の意見も聞きやすい
- 普段関わりの少ない子同士で組む
⇒活動をきっかけとして新たな関わりが生まれる
- 物事への関わり方が似ている子、違っている子を組み合わせる
⇒子供たちが安心して活動できたり、他の子供からの影響を受けて新たな自分に出会うことができる

<グループ分けに対する園の先生の言葉>

- 子供一人ひとりをよく見て、じっくりと関わることができる。
- 普段の日常では拾いきれないような子供一人ひとりの発言や気づき、アイデアを聴くことができる。
- 子供たちが友達の意見に影響されながら、自分の意見をアウトプットするなど、**みんなの声がみんなに届き、お互いに考えることができる。**

活動の流れ：④探究活動を実践し、記録する

✓ 活動を記録する

活動中、子供の言葉・表情・ジェスチャー等の多様な表現に耳を傾け、**メモ・写真・映像等で記録**します。

- ・子供たちは活動の中で**様々な疑問**を持ち、**子供たちなりの仮説**を立てながら考えを深めていきます。その過程を記録することで、子供たちの考えを知ることができます。

＜例＞・ 葉っぱは時間が経つとなぜ色が変わるのか？
⇒「お水がないから」「葉っぱはどんどん上から枯れていく」
・ 木の下（土の中）はどうなっているか？
⇒「地面の中にも枝がある」「地面の下に川がある」



- ・子供たちの姿や言葉をもとに、**次の活動へつなげていく**ことも重要です。

＜例＞・ ペンで絵を描く活動を行った際、色を混ぜたがる姿
⇒三原色の絵の具を混ぜて絵を描く活動を展開
・ 絵を部屋に投影して振り返った際、プロジェクターの光に興味を持っていた姿
⇒プロジェクターや懐中電灯を用いて、光と影で遊ぶ活動を展開
・ 色に対する「きれい」「あたたかい」という言葉
⇒子供たち一人ひとりが考える「きれい」な色、「あたたかい」色とはどんな色かを深めていく

活動の流れ：⑤振り返る・共有する

記録をもとに、子供が何に関心を持ち、何を発見し、どのような表現をしていたかを振り返ることにより、子供の世界について改めて理解を深めるとともに、子供の探究をさらに深めるための新たな問いや環境のデザインを考えます。必要に応じて、園の内外の保育者や保護者と探究のプロセスを共有します。

✓ 先生同士で振り返る

振り返りでは、**活動中には聞こえなかった子供の声や、見えなかった姿**を知ることができます。活動を振り返りながら、子供たちの姿を言葉にして分かち合う中で、「今回はこういうことができたんだ」「この子はこんな考えを持っていたんだ」といった発見をしながら、**次の活動のヒントを得る**ことができます。



✓ 子供たち同士で振り返る

- 見つけたものや作ったものなどを、子供たち自らがカメラなどで記録することで、**自分の探究活動を振り返る**ことができます。また、**子供たちが興味を持っているものや、好きなものなどを写真を通して知る**ことができます。
- 友達が見つけたものや作品を写真に記録したり、撮った写真を掲示して共有したりすることで、**新たな発見**につながります。



活動の流れ：⑤振り返る・共有する

✓ 子供たちの活動を保護者に共有する

- ・ 探究に取り組む子供たちの様子を、子供たちの写真や描いた絵を通して保護者に共有することで、子供たちが探究活動について保護者に説明するきっかけになります。
- ・ 保護者向けの展示会を開催したり、実際に子供たちが行った探究活動を体験できるコーナーを設置したりすることで、**親子が一緒に探究活動を深める機会**にもなります。

<観覧された保護者の感想>

- ・ 子供たちの想像力と生き生きとした様子が感じられた。
- ・ 子供たちが楽しそうなのがうれしかった。
- ・ 子供の自由な発想に驚かされた。



✓ 他園の先生と共有する

活動を他の園に共有することで、**それぞれの園における活動のためのアイデアや新たな気づきを得ることが**できます。また、先生にとって協働的な学びの場にもなります。

<他園の振り返りに参加した先生の感想>

- ・ 自分の中での振り返りになった。子供たちが何かに気づけるよう、**言葉かけを見直さなくてはいけない**と思った。
- ・ 活動を**自分の園にも取り入れていきたい**。保育者の気づきも大切ということを他の職員にも伝えたい。

探究活動によって見られた子供の様子

✓ 自信を持って自分を表現する姿

- ・ 普段の制作活動では自信のない姿が見られた子ども、**探究活動では正解がないため、生き生きしていた。**
- ・ いつも他の子を見たり、真似をして絵を描く子ども、活動では**周りを見ず自分の絵を真剣に描いていた。**
- ・ 普段は躊躇したり他の子の真似をしたりする子ども、それぞれが**自分の意志をはっきり持って、使いたい色を選んでいた。**
- ・ グループに分けることで**子供たちの発言が普段より増え、積極的に自分から動くなど、活動的になっていた。**
- ・ 最初は「(絵を描くことを)できない」と言いながらも、**描き始めるとイメージがわいてきて止まらず、絵を描くことを楽しんでいた。**
- ・ 当初は、子供たちが自分の考えを発表することに戸惑っている様子も見られたが、**回を重ねるごとに様々な意見や面白い答えが出てくるようになり、子供たち自身も必ずしも正しい答えが必要なのではない、ということが分かってきたようだった。**

✓ 集中して取り組む姿

- ・ **0歳児も、長い時間一人で探究に集中していた。**
- ・ 身近な素材一つとじっくり向き合うことで、普段よりも**長い時間、飽きることなく集中して遊び続けていた。**

✓ 友達との関わりを深めていく姿

- ・ 一人の子の発言をきっかけに話が展開していった。**互いに考えを否定することなく、受け入れながらも、自分の意見を発表してお互いの考えも聞く、という様子が見られた。**
- ・ 一人ひとりが自分なりの表現をする活動であるため、**自分の良さ与其他の子の良さを知るという良い経験ができています。**

探究活動によって得られた保育者の気づき

✓ 「探究活動」について

- ・ **試行錯誤**の中で取り組み、最初は「これでよいのだろうか？」と悩んだが、活動を重ねていくうちに子供たちなりの考え（声）が聞かれるようになりました。今までは活動を行うだけで終わっていましたが、**活動の中で子供たちがこんなにも考えているんだと気付かされ、それぞれの子に対して新たな一面を発見できました。**
- ・ 「探究」という言葉を難しく捉えすぎていた教員たちにとって、**子供個々の実態や学年の発達に応じた探究行動があり、それを十分に保障することが大切である**ことを学ぶ良い機会となりました。
- ・ 探究心を育てることは、普通に保育の中で実践していたつもりでしたが、**こんなに奥深いものであったのかと改めて考えるきっかけ**になり、子供たちの様子を見ていると、この実践がとても面白くなりそうな気がしています。
- ・ 子供の主体性を大切に活動を進めていますが、**一つのテーマを決めて探究活動をするという内容が新たな試み**で勉強になりました。

✓ 活動中において

- ・ 子供たちの探究している様子を見守り、待つことの大切さや環境の構成の大切さに改めて気づき、考えるようになりました。
- ・ **素材の設定から遊びが展開し、遊びの幅が広がることを再認識**しました。
- ・ 言葉の一つひとつを保育者が受け止めることで、**子供の感性や遊びが広がるのだと活動を見ていて思いました。**
- ・ **安心して「探究活動」ができる環境を作り、手を出しすぎずに子供たちを見守る**という時間は、保育者にとっても、子供たちにとっても大切な時間だと改めて思いました。

探究活動によって得られた保育者の気づき

✓ 振り返りにおいて

- 子供の視線や行動の意味、心の動きに敏感になり、何を見てこの動きになったのか、この動きはどうつながっていくのかななどを深く考えるようになりました。
- 「子供たちは何を見て」「何を感じているのか？」振り返りの時間が大切で、職員と共有することの大切さを学びました。
- 毎回振り返ることで子供たちは自分が思ったこと、感じたこと、気づいたことなどを積極的に発言することが多くなりました。
- クラスでの振り返りでは、子供の足りない面を主に話が進んでいくことが多いですが、探究の振り返りでは、一人ひとりの考えにポイントを置いて話が進んでいったのが印象的でした。

✓ 活動後において

- 以前よりも子供たちの声や疑問に耳を傾けるようになり、こんな考えをしていたのかと驚いたり感じたりすることが増えました。
- 普段の保育も指示出しではなく、「どうする？」と子供たちの意見を求めることが増えたように思います。その結果、子供たちも自らの希望や意見を言うのが「当たり前」になってきたように思います。
- 保育者が子供と共に楽しみ、共感し、わくわくすることで遊びや探究がより発展していくと感じました。
- 子供たちの自由な発想には大人がつい手を出したくなってしまうたり、素材がもったいないと感じてしまったりすることもありましたが、そのブレーキをかけずに思うままに表現することを支えるのが保育者の役割であるのだと感じ、私自身の保育を立ち返るきっかけとなりました。

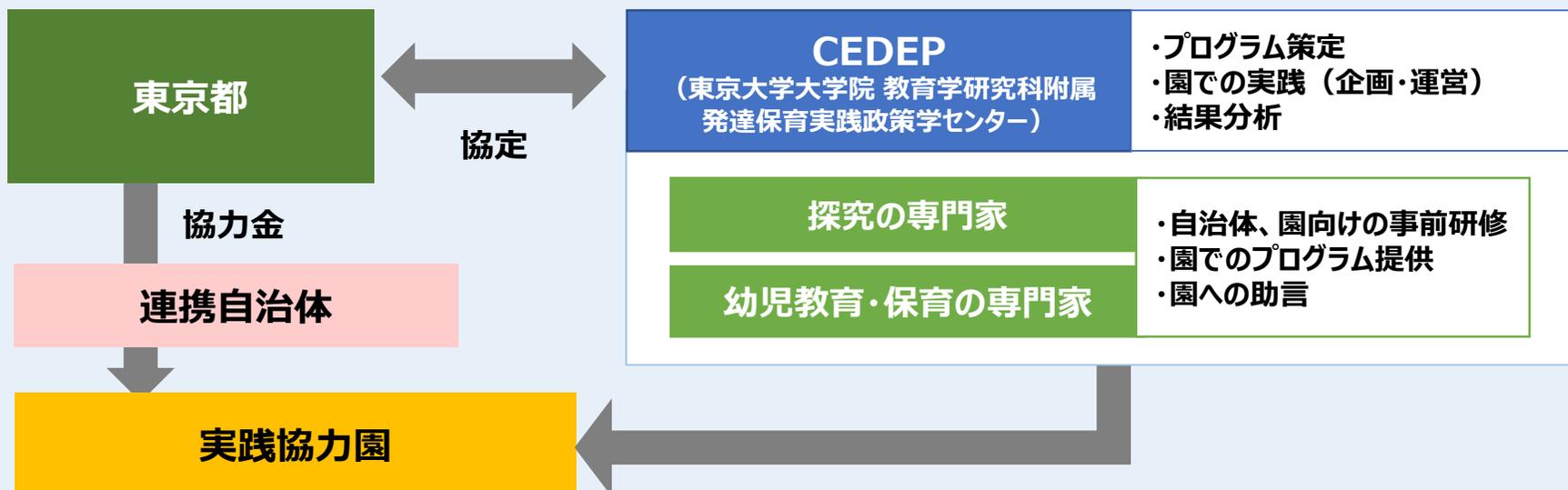
令和5年度 ベータ版プログラム実践について

都内4つの連携自治体の実践協力園14園において、各園の環境や強みを活かしながら、乳幼児の成長・発達段階や興味・関心に応じた探究活動を実践しました。

令和5年5月 ベータ版プログラム実践に係る連携自治体を公募
6月 連携自治体を決定
7月 都内全ての園及び自治体職員向けにシンポジウムを開催
(乳幼児期の「子育て」シンポジウム～探究のめばえ～)
9月～ 連携自治体における実践協力園にてベータ版プログラムを実践
令和6年3月 実践報告会の開催・完成版プログラムの策定

連携自治体	幼稚園	保育園	合計
港区	2	2	4
渋谷区	1	1	2
江東区	1	2	3
福生市	1	4	5
合計	5	9	14

体制イメージ図



令和5年度 実践協力園一覧

連携自治体	区分	園名
港区	公立	三光幼稚園
	公立	西麻布保育園
	公立	白金台幼稚園
	公立	伊皿子坂保育園
江東区	公立	塩崎保育園
	公立	亀戸第二保育園
	私立	まんとみ幼稚園
渋谷区	公立	渋谷保育園
	公立	山谷かきのみ園
福生市	私立	すみれ保育園
	私立	聖愛幼稚園
	私立	ありんこ保育園
	私立	福生杉ノ子保育園
	私立	若葉保育園

令和5年度実践協力園における探究活動の事例

都内4自治体の実践協力園14園において行われた探究活動事例の一部をご紹介します。

テーマを設定する

子供たちが園庭の自然で遊ぶことが好きなことから、自然との関わりをより深めていくため。

活動① ～園庭での自然探し～

「自然ってなんだろう？」という問いをもとに、園庭にある自然を探した。

環境をデザインする

- **準備した物** 自然物を集めるためのカップやバケツなど
- ✓ 子供たちが園庭の自然に対し、より丁寧に目を向けられるよう、砂場の道具やテントを片付けた上で活動を行った。

探究活動を実践する

- **活動内容**
園庭にある様々な自然を探し、身近にある自然を発見した。
- **子供たちの様子**
 - ・「自然ってなあに？」という問いに対し、以下のような答えが上がった。
 - ✓ 「葉っぱ。あとぶどうとか。」 ✓ 「木とか葉っぱとか、どうぶつも。」
 - ✓ 「虫も自然なんだよ」 ✓ 「くだものも自然。野菜も自然。」
 - ・園庭で、フウセンカズラの種を取り出したり、ハナモモの実を踏んでつぶしたりなど、子供たちは様々な自然と出会っていった。
 - ✓ （葉っぱの葉脈を指して）「これは、葉っぱのけっかん。」
 - ✓ （葉っぱを持って）「見て！穴あいてるよ！」「虫が食べてた！」
 - ・活動後は写真を見ながら、子供たちが見つけた自然を共有した。

活動スケジュール（4歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 園庭での自然探し	30分程度	5人
② 自然の色を作り、描く	30分程度	5人
③ 集めた自然物を使って室内で遊ぶ	30分程度	2～5人
④ 集めた自然物を日常の遊びに取り入れる	30分程度	15人



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・子供たちは、興味を持ったものにどんどん向かって行っていた。
 - ・皆それぞれ興味は異なるが、見つけたものを共有する楽しさも味わわせてあげたい。

活動② ～自然の色を作り、描く～

園庭で見つけた自然を絵で表現する活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 絵の具、筆、白画用紙（大・中・小）、園庭で集めた自然物
- ✓ 子供たちが感じた自然を表現しやすいよう、園庭にある自然に近い色を10種類以上用意した。
- ✓ 園庭の自然を感じながら描く活動ができるよう、園庭が見えるテラスにて活動を行った。



探究活動を実践する

- **活動内容**
3種類の大きさの画用紙を自由に選び、園庭が見えるテラスにて、見つけた自然をもとに子供たちなりの自然を絵で表現した。
- **子供たちの様子**
 - ・ 絵の具の混色を楽しみながら、色を次々と混ぜ、園庭で見つけた葉っぱや梅の実の色を作り出していた。
 - ・ 友達同士でそれぞれが描いた絵をつなげることで、新たな物語を想像しながら絵で表現していた。
 - ・ 葉っぱに絵の具を塗ってスタンプのように紙に色を写し、きれいに色を写せるよう何度も試す姿が見られた。

振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・ 子供たちが混色や色作り、絵を描くなど、やりたいことを十分に楽しむことができる環境が、集中力を高めるということを実感した。
 - ・ 自分で考えてイメージを膨らませながら色を作るなど、各々が自分の好きなことを楽しめていた。
- **専門家から**
一人の子供が始めた混色により、他の子供が混色に興味を持ったり、ある子供が作った色がそのまま他のグループでも使われたりするなど、クラス全体が影響し合い、関わられた活動となった。

活動③ ～集めた自然物を使って室内で遊ぶ～

園庭で集めた自然物を室内遊びに取り込んで自由に遊んだ。

環境をデザインする

- **準備した物** OHP、ライトテーブル、布、園庭で集めた自然物、大型積み木、木の人形、活動②で描いた絵を印刷したOHPシート
- ✓ 自然物を小人の船などに見立てていた子供の様子から、遊びのきっかけになるよう、木の人形を用意した。
- ✓ OHPやライトテーブルなど光を発する装置を使うことにより、普段と異なる見え方で自然をよりじっくり観察できるよう準備した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
OHPやライトテーブルを使いながら、室内にて自然物で遊んだ。
- **子供たちの様子**
 - ・ OHPを使い、一つひとつ異なる色や形を持つ葉っぱや実などがどのように映るかを試した。
 - ・ 子供たちが描いた自然の絵をOHPで壁に投影し、自然物と組み合わせながら物語を作ったり、全身を使ったゲームを生み出したりしていた。
 - ・ OHPの上に色とりどりの葉っぱや実などを乗せて「幼稚園」や「基地」を作ったり、ライトテーブルの上で自然物と小さな人形を組み合わせ「迷路」を作ったりするなど、自然物を取り入れながら、遊びを生み出していた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
葉や実での遊び方に決まりがないことに気付かされた。フウセンカズラを人形の帽子にしたり、大きい葉をベッドにしたりと、子供たちは自然物を色々なものに見立てていた。自然物は多様かつ抽象的なものであるため、それぞれの感性で遊べるということを感じた。
- **専門家から**
活動時間が足りないくらいオリジナルの遊びが生まれていた。自分たちで選んだ自然物から、新しい遊びを生み出し、皆で共有できるルールを作りながら、遊びを発展させていた。自然の持つ定まらない形や多様性が、子供たちの活動や探究も多様にする可能性を見せていた。

活動④ ～集めた自然物を日常の遊びに取り入れる～

活動③よりも日常の遊びに近い形で、自然を使って遊ぶ活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 木枠を付けたライトテーブル、OHP、集めた自然物、砂、子供たちが描いた絵を印刷したOHPシート、クレヨン、色画用紙
- ✓ 自然物を使いながら遊べるよう、教室から見えるテラスに子供たちが集めた自然物を置いた。
- ✓ 日常の自由遊びに近い形になるよう、今回はあえてグループ分けは行わなかった。

探究活動を実践する

● 活動内容

ライトテーブルやOHPを準備し、絵を描けるコーナーなどを教室に設けたうえで、自然物を使いながら自由に遊んだ。

● 子供たちの様子

- ・ 自然物をテラスに置いたことで、ごっこ遊びの中で、自然を野菜に見立てて部屋に持ち帰り料理をする、など自然物を取り入れて遊ぶ様子が見られた。
- ・ ライトテーブルを使って砂を光に照らし、葉っぱを使いながら砂遊びをしていた。
- ・ OHPに自然物を乗せ、どう映るかを試すなど、子供たちは思い思いの場所で自然を取り入れた遊びを展開していた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 子供が自らやりたいと主体的に動けるような環境の構成が重要だと改めて感じた。
- ・ 環境の構成によって、子供たちが自ら考え遊びが展開されていた。今回はグループ分けを緩やかにしたことで、子供たちの遊びが自然に展開される中で、好きなことができて、様々な気づきにつながっていた。

テーマを設定する

園の名前である「かきのみ」と、子供たちが日頃から親しんでいる園庭の「柿の木」について、考えを深めるため。

活動① ～木と子供たちの関係～

「柿の木とは何か」という問いをもとに、柿の木について詳しく知る。

環境をデザインする

- 準備した物 色鉛筆、水性ペン、紙

探究活動を実践する

● 活動内容

「柿の木」について、実際に園庭の柿の木に触れながら考えた。その後、柿の木を実際に模造紙等に描いた。

● 子供たちの様子

- ・ 柿の木に改めて触れ合い、「すべすべ」「ざらざら」「ふわふわ」と木の手触りを表現したり、「木はまっすぐに見えるけどグネグネしているよ」と発見したりする姿が見られた。
- ・ 柿の実について、「木には赤ちゃんがいる。風が吹くと赤ちゃんは落ちるの」と表現していた。

活動スケジュール（5歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 木と子供たちの関係	50分程度	4人
② 木と子供たちの関係2	50分程度	4人
③ 木は生きている	40分程度	10人



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

普段絵を描くことをためらう子供も、実際に木を見ながら絵を描いたことで、興味を持ってどんどん描き進めていた。

● 専門家から

- ・ 木の解釈がそれぞれで面白い。似ていてもどこかしらに自分のアイデアがある。
- ・ 多くの子供たちが「木は生きている」と言っていた。

活動② ～木と子供たちの関係 2～

これまでは木の見えている部分を考えてきたが、今回は、目に見えない世界である木の下（土の中）について考えた。

環境をデザインする

- 準備した物 色鉛筆、水性ペン、紙

探究活動を実践する

- 活動内容
 - ・「柿の木の下の世界はどうなっているか」について話し合った後、再び柿の木を見て触れに行き、木の下の世界を想像しながら絵に描いて表現した。
 - ・絵を描き終わった後は、お互いの絵を見合って描いたものについて共有した。
- 子供たちの様子
 - ・柿の木の根っこに触れながら、「けっこうやわらかい」「落とし穴がある」「(周りの土を触って)ここは硬い」などの発見をしていた。
 - ・実際に紙で描いてみるときは、「石がある」「雨の水を吸い取って湿っている」「モグラとダンゴムシがいる」など、それぞれが持つ土の下の世界のイメージを表現していた。



振り返りをふまえた気づき

- 園の先生から
 - ・木の下の世界について、最初は「わからない」という感じだったが、描き始めると子供たちは生き生きしていた。
 - ・観察したものではなく、イメージしたものを描くのは新鮮であった。
- 専門家から
 - ・活動を重ねる中で、子供たちと木との関係が作り出せてきた。

活動③ ～木は生きている～

さまざまな機材を使って根っこや葉脈をじっくり観察し、それらを多様な画材によって表現した。

環境をデザインする

- **準備した物** ダンボール、木の根っこ、卓上ライト、模造紙、ペン、クレヨン、マイクロスコップ、Webカメラ、PC、トレース台、ラミネート加工した葉の拡大写真、透明なシート、トレーシングペーパー

探究活動を実践する

● 活動内容

根っこや葉脈をじっくり観察するために、3つのセットアップ（①トレース台で葉脈を観察するもの、②根っこを照らし出して直接観察するもの、③マイクロスコップで葉の表面を拡大し観察するもの）を用意した。活動後は、それぞれのグループの描いたものを共有した。

● 子供たちの様子

- ・ ①では、葉脈を見ながら道路や家を描いており、その理由として「街みたい」「迷路みたい」に見えたから、と答えていた。
- ・ ②では、設置された根っこを見ながら、「(根っこは)ここもつながっている」と発見し、土の中の世界を想像してダンゴムシやモグラを描いていた。
- ・ ③では、スコープで拡大された葉脈を見ながら、「茎みたい」「壊れないように模様があるんだ」と、葉脈を別のものにとえたり、その役割を考えたりする様子が見られた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ もっとじっくり時間を確保しても良かったかもしれない。
- ・ 葉っぱと根っこをよく観察したので、大きくなってきた柿の実でもやってみたい。

● 専門家から

みんなと同じ空間で同じ紙に描くというのは、自分だけで描く感覚とは異なるものがある。

テーマを設定する

園のシンボルとして裏庭にオリーブの木があり、クラスの名前も「オリーブ」であるが、子供たちがオリーブについてあまり知らない様子であることから、「オリーブ」をテーマとして設定した。

活動① ～オリーブってなあに？～

「オリーブってなあに？」という問いを設定し、身近であるがよく知らないオリーブについて知るための活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 白い布、オリーブの枝と実、虫眼鏡や拡大鏡
- ✓ オリーブの色や形がよく見えるよう、白い布の上にオリーブを用意した。



活動スケジュール（4歳児クラス）

活動内容		時間/回	人数/回
①	オリーブってなあに？	60分程度	4人
②	オリーブを描く	60分程度	4人
③	絵の具でオリーブを描く	60分程度	4人
④	土の下のオリーブを描く	60分程度	4人



探究活動を実践する

● 活動内容

「オリーブってなあに？」という問いをもとに、オリーブをよく知るため、オリーブの実を集めたり、葉っぱを虫眼鏡で観察したり、匂いを嗅いでみたりなど、子供たちそれぞれの方法でオリーブを探究した。

● 子供たちの様子

- ・「オリーブってなあに？」という問いに対し、「パンにかけて食べるもの」「まだわからない」と答えるなど、子供たちはオリーブについてあまり知らない様子であった。
- ・葉っぱの表と裏を観察し、触る、実の匂いを嗅ぐ、葉っぱをちぎって葉っぱの中の匂いを嗅ぐなど、様々な感覚を使ってオリーブを知ろうとしていた。
 - ✓（葉について）「ぎざぎざになっている」「つぶつぶしている」「こっちはつるつる」
 - ✓（実について）「バナナのおいがする」「オリーブの中は紫だと思っていたけどむいてみたら緑だった」「ぶどうみたい」



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・子供たちが素直に気持ちや言葉を出していた。
- ・子供のつぶやきのバリエーションに驚かされた。子供たちがいろんな場面で言いたいことがあるんだな、と驚いた。

● 専門家から

オリーブに関する知識を得ることよりも、子供たちが各々の視点で想像力を働かせながらオリーブを知っていくことが活動のポイントとなる。



活動② ～オリーブを描く～

活動①で観察したオリーブについてより深く理解するため、オリーブを絵で表現する活動へと移った。

環境をデザインする

- **準備した物** OHP、ロール紙、画用紙、模造紙、上質紙、トレーシングペーパー、OHPシート（透明のフィルム）、マジックペン
- ✓ 子供たちが表現に合わせて自由に紙を選べるよう、複数の種類の紙を用意した。

探究活動を実践する

● 活動内容

オリーブをOHPで壁に映し出したり、虫眼鏡等で拡大しながら観察し、各々が選んだ紙にペンでオリーブを描いた。

● 子供たちの様子

- ・ 「前回と比べてオリーブはどう違う？」という問いから、葉っぱの色が変わっていることに気づき、「お水がないから」「葉っぱはどんどん上から枯れていく」などと仮説を立てていた。
- ・ オリーブの実について、「ここはブドウ色、ここはシャインマスカットみたいな色、ここはオリーブの色」など、様々な言葉で色を表現していた。
- ・ 「はっぱにけがはえている」「きいろいぶつぶつがある」など、前回よりさらにオリーブをよく観察し、新たな発見をしていた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 葉っぱを描くとき、最初は一つの色で描いていたが、今日は葉っぱの表と裏が違うと気付いた子が色を変えていた。
- ・ 今までではそんなに自然に興味を示さず遊んでいた子も、色のついた落ち葉を集めて持ってきたり、ごっこ遊びをしたりという姿が見られるようになった。
- ・ 実の色について、同じ紫でもいろんな紫に例えるなど、様々な言葉で色を表現していた。
- ・ いつも他の子を見る子も、今日は周りを見ず自分の絵を真剣に描いていた。

活動③ ～絵の具でオリーブを描く～

前回の活動でオリーブを描く際に色を混ぜたがっていた子供たちの姿から、絵の具を使ってオリーブを描いた。



環境をデザインする

- **準備した物** 絵の具（赤・青・黄）、筆、パレット、透明の瓶、オリーブの実と葉、絵を描く用のボード

✓ 筆を洗う水の色の変化が分かるよう、透明の瓶を準備した。

探究活動を実践する

● 活動内容

オリーブの色と全く異なる三原色（赤、青、黄）から色を作り、「オリーブの色や形に着目して、絵で表現した。」

● 子供たちの様子

- ・ 前回よりもさらにオリーブの葉っぱや実を細かく観察し、オリーブの葉や実の色の濃淡、葉っぱの表裏の違いなどを発見していた。
- ・ 子供たちはいろいろなオリーブの色を想像して色を混ぜて描いていった。色を混ぜながら「緑になっちゃった！」「茶色になっちゃった！」と、色が変わるごとに感動する様子が見られた。
- ・ 筆を洗う水入れを透明なものにしたことで、ある子は水の色の変化に興味を持ち、パレットに水の色を移したがる子もいた。



振り返りをふまえた気づき

● 専門家から

- ・ 子供たちが絵の具を自由に使ったのはこの日が初めてで、三原色でいろいろな色を作っていくということをしたことがなかった。
- ・ ある子は、「これはどんな色になる？」と色と対話しながら進めていた。
- ・ 筆を洗う水入れの中の水は自分の意図に関係なく、必然的に色が変わっていくため、色の変化を知ることができた。

活動④ ～土の下のオリーブを描く～

活動③で子供たちが絵の具で描くことを非常に楽しんでいた様子から、今回も絵の具を使用してオリーブを描いた。

環境をデザインする

- **準備した物** 絵の具（赤・青・黄）、筆、パレット、透明の瓶、オリーブの実と葉、絵を描く用のボード

探究活動を実践する

● 活動内容

オリーブの木の形や大きさについて考えた後、オリーブの木の下についても想像し、絵で表現した。

● 子供たちの様子

- ・「オリーブの木はどんな形？」という問いかけに対し、子供たちはオリーブの木の形を全身を使って表現していた。
- ・「大きさはどのぐらい大きい？」という問いかけでは、遠くから手で木の大きさを測る、葉っぱと手の大きさと比べて測るなど、子供たち独自の手段で大きさを測っていた。
- ・さらに木を描いた後に紙を足し、「オリーブの土の下はどうなっている？」という問いかけから、オリーブの木の下を想像して絵を描いた。「地面の中にも枝がある」「地面の下に川がある」「土を赤くしたのはあったかいから。これから冬で寒くなる。寒くなるとベストを着るから、土がベストの代わりで根っこをあっためている」など、様々な仮説を立てて絵を描いていた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・子供たちは自分から進んでこういう色を作りたいと言ったり、自ら観察しながらいろんな発見をしたりしていた。
- ・探究活動を複数回経験したことで、子供が本来持っていた力を発揮できるようになったことが分かった。

● 専門家から

子供たちは躊躇うことなく色を混ぜて描き始めていた。作りたいイメージがあって、感覚的に自分の思いを表現しており、こちらが問いを用意しただけで、子供たちはとても集中していた。

テーマを設定する

日頃から園庭遊びの中で土に触れ親しんでおり、新たな視点で土と関わるため。

活動 ～粘土とふれあう～

普段の泥遊びで子供たちが泥の感触を楽しみ、手の使い方を工夫しながら粘土の変化や質の変化を様々に探究していた様子から、道具を使わずに手で粘土と関わるための活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 土粘土、木のプレート、水の霧吹き（保育者が使用）

探究活動を実践する

● 活動内容

粘土のもとである土を触り、諸感覚を通して土粘土そのものをじっくり探究した。

● 子供たちの様子

- ✓ 匂いを嗅ぐ⇒「土のにおいがする」
- ✓ 人差し指で優しく触ってみる⇒「もちもちしている」「冷たい」
- ✓ 両手で挟んで持ってみる⇒「重い！」「ねとねとしている」
- ✓ 手のひらで叩いてみる⇒「手が少し茶色くなった」
- ✓ 叩いて平たくする、持ち上げる、なでてみる
- ・ 皆で土粘土とじっくり触れた後に、子供たちが思い思いの方法で自由に土粘土に触れ合った。丸めて団子を作る、細く伸ばす、粘土を高く積み上げる、「ゆきだるま」や「かめ」などを作るなど、様々な関わり方が見られた。

活動スケジュール（4歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
粘土とふれあう	40分程度	12~13人



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 粘土を触る場所によって温度が違うなど、いろいろなことに気づいていた。
- ・ 普段粘土でものを作ることはあるが、粘土そのものにじっくり触れる機会がなかった。子供がそれぞれのペースで、感じるままに粘土に触れていた。

● 専門家から

- ・ 土粘土に触れながら、固くなる変化に気づき、特性を活かして楽しむ過程がみられた。
- ・ 制作で使うことが多い粘土と、じっくり向き合うことを楽しむ、という過程を見ることができた。

テーマを設定する

日頃から行っている泥遊びを通して、感触やいろいろな形状に変わる面白さを味わうため。

活動 ～粘土とふれあう～

土粘土と自由に触れ合い、粘土の感触を楽しむ。

環境をデザインする

- **準備した物** 木枠を付けたライトテーブル、園庭の砂、土粘土、床に敷く用の白いテーブルクロス
- ✓ 園庭での泥遊びでは道具を多く使っていたが、この活動においては道具を用いず、手と身体を使って土粘土と直接触れ合うことを重視した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
全身を使って粘土に関わるため、裸足になり、身体をほぐしてから、白いシートの上に出した土粘土と自由に触れ合った。
 - **子供たちの様子**
 - ✓ ライトテーブルに砂を置き、砂の感触と影を楽しむ
 - ✓ 土粘土を裸足で踏んでみる
 - ✓ 土粘土を手にとって丸めたりつぶしたりする
 - ✓ 土粘土に開いた穴をアリの巣に見立てる
 - ✓ 斜面を作って、グループみんなで土粘土の滑り台を作る
 - ✓ 土粘土に手や足の型を付ける
- など、室内においてもどろんこ遊びを楽しむ様子が見られた。

活動スケジュール（3歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
粘土とふれあう	30分程度	4~6人



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
普段、感触遊びがあまり好きではない子も楽しんでいました。園にある泥と活動で使った柔らかい土粘土の感触が違った。
- **専門家から**
自分の手や体の動かし方によって、土粘土が変化するという面白さや発見があった。ただ感触を楽しむだけ、形あるものを制作するだけでなく、粘土と子供との様々な身体的関わりと、遊びの広がりが見られた。

テーマを設定する

山や森など自然の中で一日過ごす園の定期行事である「森の教室」を通して、自然への興味をさらに深めるため。

活動 ～森歩き～

3～5歳の異年齢のグループに分かれ、森歩きをした。

環境をデザインする

- 準備した物 なし

探究活動を実践する

● 活動内容

子供たちの興味をもとに、森の中の様々な自然に触れた。

● 子供たちの様子

- ・ 枝や葉っぱ、根っこなどにつかまりながら斜面を登るなど、整備されていない道を好んで歩いていく姿が見られた。
- ・ やまびこを様々な場所で試し、なぜやまびこが聞こえるかを考えた。
 - ✓ 「あっち（やまびこが聞こえた方向）にやまびこさんがいる」
 - ✓ 「みんなで声を合わせると響く」
 - ✓ 「富士山に当たって返ってきている」
- ・ 冬イチゴを見つけて食べたり、カモシカに出会ったりなど、森の中ならではの発見を楽しんだ。



活動スケジュール（3～5歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
森歩き	1日	10人程度

振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

これまでスルーしていた部分、当たり前になっていること、慣れてきて気にしていなかったことも、今日は意識的に「何の音？」と問いかけることで引き出すことができた。

● 専門家から

定期的に行っているからこそ、子供の心の中で経験が積み重ねられている。子供たちから出てくる答えを大切にすることで想像力の幅が広がっていく。

テーマを設定する

石やタイルを使って、素材に触れたり、見立て遊びをしたりしながら遊びを生み出す経験をするため。

活動① ～石を観察する～

散歩の際に子供が石を拾い、その形に興味を持っていたので、石を観察する活動を行った。

環境をデザインする

- 準備した物 石、白と黒の紙、虫眼鏡、タブレット、子供用カメラ

探究活動を実践する

● 活動内容

子供たちが拾ってきた石を使い、「石を見てみよう、触ってみよう」をテーマに石を探究した。

● 子供たちの様子

- ・石を虫眼鏡で観察し、石を触って「ざらざら」「つるつる」「つめたい」といった感触を楽しんだ。
- ・ある子が石を叩き合わせたことから、他の子も石をこすり合わせ始めた。石をこすり合わせて白い砂が出てきたとき、先生が黒い紙を出したことをきっかけに、砂を指で触り、虫眼鏡で観察するなど活動がさらに広がった。
- ・石を積み上げたり、石で「かお」や「ぶた」など形を作ったりしていた。

活動スケジュール（5歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 石を観察する	40分程度	5人
② 石を知る	30分程度	5人



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・石だけを使って、40分もの長い活動であったが、もっと遊べると思った。
- ・石一つで子供たちは色々な方法で楽しめていた。
- ・普段よりもたくさん言葉を発していた子供の姿に驚いた。

活動② ～石を知る～

活動①とは異なる石（黒石と白石）を用意し、石を探究する。

環境をデザインする

- **準備した物** 黒石、白石、様々な色の画用紙、額縁、大判の木の板、虫眼鏡、子供用カメラ、トレイ
- ✓ 中央に石やトレイ、紙、額縁などの素材を置いて、子供たちが使いたいものを自由に選び取れるよう工夫した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
子供たちが黒石や白石を選び、自由に石と触れ合った。
- **子供たちの様子**
 - ・ 「つやつや」「白い石はざらざら」といった感触の違いに気づいていた。
 - ・ 石を使って一人ひとりが様々な遊びに夢中になっていた。
 - ✓ 虫眼鏡を使って、石を観察する
 - ✓ 200個以上石を並べて数える
 - ✓ 画用紙に黒い石で絵や線を描く
 - ✓ 黙々と迷路を作る
 - ✓ 石を並べて「月」「恐竜」などを作る
 - ・ こども用カメラを使って、自分や友達の作品を子供たち自ら記録した。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
活動が終わった後、全員が「楽しかった」と言っていた。一人ひとり自分の場所があったからこそ、じっくり楽しむことができた。

テーマを設定する

園の特色として「和太鼓」の活動を行っており、技術の習得ではなく、和太鼓を叩く気持ち良さや楽しさを味わい、意欲や挑戦する力を身につけることなどをねらいとしている。

そのため、太鼓を使いながら音への興味関心を広げ、音を楽しむことを目的とした。

活動① ～太鼓や様々なものを叩いてみる～

触るところから音が生まれることを体験するために、まず手を使って太鼓を叩くことから始める。

環境をデザインする

- **準備した物** 和太鼓（大・小）、バチ（太鼓、鉄琴のバチ）、どんぐり、鍋やフライパン、プラスチックコップ、練習用手作り太鼓
- ✓ 子供たちが自由に太鼓を叩き比べられるよう、大きさや種類の異なる太鼓を並べた。

活動スケジュール（2歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 太鼓や様々なものを叩いてみる	30分程度	4人
② 音の振動を探究する	30分程度	4人
③ 自分の好きな音に出会う	30分程度	4人



探究活動を実践する

● 活動内容

- ・最初に手で太鼓を叩き、自由に太鼓に触れて音の違いを楽しむ。
- ・大小様々な太鼓を叩き比べた後、和太鼓だけでなく鍋やボウルなど様々なものを、手やバチを使って叩いた。

● 子供たちの様子

- ・先生や友達と一緒に叩いたり、叩きながら追いかっこをするなど、太鼓を通じたコミュニケーションが生まれていた。
- ・太鼓の大きさによって音が違うことを発見し、その違いを楽しんでいた。
- ・太鼓の側面の穴に興味を持つ子もいた。
- ・どんぐりを太鼓の上に乗せて叩くことで、強く叩くとどんぐりが跳ねて落ちることを楽しんでいた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・最初太鼓に触れようとしなかった子も、友達に誘われたことで、叩き始め、楽しむ様子が見られた。
- ・透明なプラスチックカップの中のどんぐりの動きで「音を可視化する」ことが面白い。太鼓の音でどんぐりが跳ねるなど、どういことが起きるのか、子供にも伝わりやすく、音を出すこととは違った面白さがあった。

● 専門家から

自分達が拾ったどんぐりを用い、和太鼓の音が可視化され、子供たちが楽しんでいた。また、離れていても、太鼓で呼応してコミュニケーションを交わしていた。和太鼓は大きな可能性を秘めた素材だと感じた。



活動② ～音の振動を探究する～

活動①をもとに、音の振動や空気の動きを可視化し、音によってどのような変化が生まれるかを探究する。

環境をデザインする

- **準備した物** 太鼓、バチ、たらい、ベンチ、ラップ、スパンコール、どんぶり

探究活動を実践する

● 活動内容

色水の入った器やドングリを使って、音によって生まれる振動を可視化し、観察した。

● 子供たちの様子

- ・ 太鼓の上に色水の入った器を置き、叩いた振動で色水がどのように動くかを試した。
- ・ ベンチに張ったラップの上に色水やドングリを乗せ、ラップを叩いて振動する様子を観察した。太鼓よりベンチで色水が跳ねる様子に興味を持つ子もいた。
- ・ 色水の入った器を地面に置いて叩くときと、太鼓の上に置いて叩くときの色水の動きの違いを試した。地面では中央の水が跳ねるが、太鼓の上では全体的に水が跳ねるなどの発見が得られた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 言葉がいないコミュニケーションの面白さがあった。
- ・ 子供たちの関心が色水をばちで叩くことに向いてしまい、最後には水遊びのようになってしまった。

● 専門家から

先生の予想を裏切られたということは、子供がやりたいことを教えてくれたということであり、先生が描いていた活動を、子供側に寄せていくことが子供たちの喜びにつながる。太鼓で使うばちを濡らしたらいけないといった固定概念を外すことで、子供たちの表現ややりたいことも広がる。

活動③ ～自分の好きな音に出会う～

音そのものに触れられるよう、楽器とどんぐりを用いて様々な音を発見する活動を展開した。

環境をデザインする

- **準備した物** 模造紙、どんぐり、和太鼓、平太鼓、木琴、鉄琴、紙コップ、タンバリン

探究活動を実践する

- **活動内容**
 - ・ 導入として、先生が叩く太鼓の音に合わせて体を動かした。先生の「何になりたい？」という問いかけに対し、動物などになりきって全身を使って表現するなどして、音に関心を持つきっかけを作った。
 - ・ その後、紙を敷いた床の上で、様々な楽器とどんぐりを使いながら音について探究した。
- **子供たちの様子**
 - ・ 鉄琴や太鼓の上にどんぐりを落とし、音の違いを楽しんだ。
 - ・ タンバリンの裏にどんぐりを入れて音を出す、爪を使って鉄琴の音を出す、など一人ひとりが色んな音を出すことを試していた。
 - ・ 友達が出している音に自分から興味を示したり、お互いがやっていることを一緒に試してみるなどの様子も見られた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・ 「好きな音は？」という問いかけに、ある子が「どんぐりをたらいに入れる音」というと、他の子供たちも自分からその音に関心を向けていた。
 - ・ 全員が音の変化を自分から探究しようとしていた。
- **専門家から**
 - ・ 最初に体をほぐしてから音の探究に進むという方向性が良かった。先生が子供の興味関心に沿って慎重に活動に取り組んでいた。

テーマを設定する

生活する中で欠かせないものであり、当たり前と一緒に生活している音について、どう感じ、どう考えているのかについて深めるため。

活動① ～「アトリエ」を知る・音ってなんだろう？～

園では探究活動の際、「アトリエ」と呼ばれる部屋を使用している。

3歳児にとって初めての空間である「アトリエ」において、「アトリエではどんなことができるだろう？」という問いとともに、「音ってなんだろう？」と考える活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** タンバリン、すず、マラカス、トライアングル、カスタネット
- ✓ 棚に楽器を置くことで、「アトリエ」を知るうちに自然と音や楽器に触れられるようにした。

活動スケジュール（3歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 「アトリエ」を知る・音ってなんだろう？	20分程度	3~4人
② 音のバリエーションを増やす・組み合わせる	50分程度	3~4人
③ 音・穴・空気の関係性について考える	50分程度	3~4人



探究活動を実践する

● 活動内容

「アトリエ」や「音」についてのイメージを聞いたうえで、子供たちそれぞれが興味を持った楽器に触れながら音を探究した。

● 子供たちの様子

✓ 「音って何かな？」

⇒「こけこっこ」「ねこはにゃ～」「歌も声、声も音だから」

✓ 「楽器はどんな音がする？」

⇒マラカスは「つぶつぶの音がする」、カスタネットは「かんかん」、すずは「ちりちり」「チリンチリン」

- ・「アトリエの中で、音を探してみよう」と問いかけると、走るときの音や、机やベンチを叩く音、ものが落ちたときの音に気付いていた。
- ・複数の楽器を組み合わせて音を出すことを試したり、楽器で音を鳴らしながら歌を歌ったり踊りだすなどの様子が見られた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・最初緊張した様子であった子も、楽器を手にするると笑顔になり、表情がほぐれていた。
- ・座っていると、楽器に触れている表情が全然違った。
- ・うるさい音や、大きい音が「楽しいから好き」という子が多かった。

● 専門家から

- ・身体を動かしつつリラックスしながら、楽器を準備しておいたことで子供たちが活動を楽しんでいた。トライアングルが特に子供たちの興味を引き出しているようだった。
- ・子供たちに、音は「うるさい」「大きい」だけでなく、静かで繊細な音など、多様な音があることを知ってもらえるとよい。



活動② ～音のバリエーションを増やす・組み合わせる～

活動①に使用した楽器に加えて、柔らかく繊細な音に気づけるよう、弦楽器などより多くの楽器に触れながら、好きな音を探した。

環境をデザインする

- **準備した物** スネアドラム、タンバリン、トライアングル、卓上用木琴・鉄琴、ウクレレ、ツリーチャイム、ウッドブロック、すず、マラカス

探究活動を実践する

● 活動内容

前回の活動についての感想を振り返ったうえで、繊細な音や柔らかい音にも気づける環境の中で楽器に触れていった。

● 子供たちの様子

- 繊細な音や柔らかい音にも気づけるような問いかけや環境設定をしたことで、太鼓などをより優しく叩く様子が見られた。
- オルガンの鍵盤を押しても音が鳴らないことに気づき、「壊れているのでは？」「コンセントが入っていないのでは？」など試行錯誤していた。しばらくして、ペダルが動くことに気づき、音が鳴ると驚いた様子で「こわい音」「ぶんぶんぶん（はちのような）音」と表現していた。
- スネアドラムを叩くと側面にある穴から空気が出てくることに気づき、空気と音の関係性を発見していた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

活動の最初に「大きい音」や「うるさい音」以外にも音があるのでは？と問いかけたことで、前回の活動よりも、優しく楽器を叩こうとする子が多かった。

● 専門家から

誰かの気づきを全体で共有することが大事。クラスみんなの探究にできるとよい。

活動③ ～音・穴・空気の関係性について考える～

活動②においてスネアドラムの穴から出る空気を発見したことから、スネアドラムに焦点を絞り、空気と音の関係性を探究した。

環境をデザインする

- **準備した物** スネアドラム、クレヨン、画用紙、透明のビニールシート、ひも、針金

探究活動を実践する

● 活動内容

スネアドラムの穴から出る空気について、絵に描いたり、紐などを使ったりして空気の形を表現した。

● 子供たちの様子

- ・ 活動②での発見を振り返ったうえで、「空気はどんな形で穴から出てくる？」と問いかけると、「へびみたいにニョロニョロ」「強いたたくと長く出てくる」「丸い」「ぐるぐる」という答えが上がった。
- ・ 「空気は長い」という言葉をもとに、長い針金や麻ひもで空気の形を表現した。
- ・ 「空気は見える！」という言葉から、画用紙やスネアドラムに纏わせたビニールシートの上で絵で表現した。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

「空気は見えない」という子は、「どんな感じがする？」といった問いかけや紐といった素材によって、徐々に空気のイメージが引き出されていったようであった。

● 専門家から

先生側の目的を押し付けることなく、子供たちがやりたいというタイミングに合わせて、他の友達の発見を共有し、子供たちに提案しながら活動を進めていたのがよかった。

テーマを設定する

生活する中で欠かせないものであり、当たり前と一緒に生活している音について、どう感じ、どう考えているのかについて深めるため。

活動① ～音ってなあに～

「音ってなに？」「音って知ってる？」と子供たちに問いかけをし、音について話し合いながら考えを深めた。

環境をデザインする

- 準備した物 特になし

探究活動を実践する

● 活動内容

子供たちに以下の問いかけを行い、音に対する子供たちの考えを探った。

● 子供たちの様子

✓「音ってなに？」

⇒「音はうるさい」「車」「かみなり」「雨」「大声」

✓「好きな音は？」

⇒「鈴の音が好き」「音がないのが好き」

✓「嫌いな音は？」

⇒「ガンガン」「大きい音」「静かなのはきれい。楽しくないから。」

✓「10秒間静かにするとどんな音が聞こえる？」

⇒「誰かの声」「足音」「何も聞こえない」

活動スケジュール（5歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 音ってなあに	20分程度	3~4人
② 身体の音を聞いてみる	50分程度	3~4人
③ 心臓の音を聞いてみる	50分程度	4~5人
④ 虫の心臓の音を聞いてみる	50分程度	4~5人



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

グループによっては、一人の子の発言をきっかけに話が展開していった。互いに考えを否定することがなかったのはよかった。

活動② ～身体の音を聞いてみる～

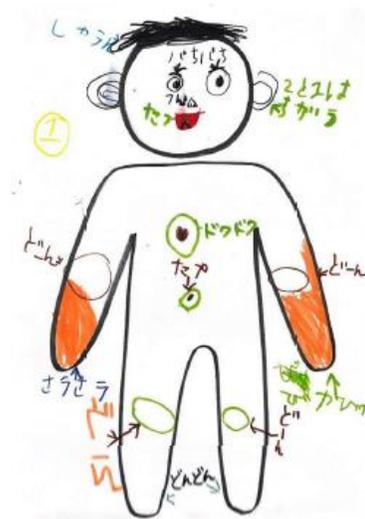
様々な道具や素材を使って、身体からどんな音が聞こえてきたかを絵で表現する。

環境をデザインする

- **準備した物** ラップの芯、糸電話、聴診器、画用紙、クレヨン、ICレコーダー、スピーカー、ビニールシート
- ✓ 聴診器を使うため、小さな音も聞きやすいよう、静かな場所での活動に変更した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
導入として身体の部位について話したあと、身体から聞こえる音について話し合い、身体から聞こえた音を絵に描いて表現した。
- **子供たちの様子**
 - ・「身体からどんな音がする？」という問いに対して、「頭をかくときの音」「食べるときに、歯の音がする」「骨は固いから音はするけど、脳みそは音がしない」などの答えが上がった。
 - ・身体の音を糸電話や聴診器を使って聞いた。「（胸から）ドンドンって音がする、こわいこわい！」「（他の人は）どくどくって音がする」など、他の人の身体から聞こえた音と、自分の身体の音の違いを発見していた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
自分が見つけた音を他の子に共有したいという子が多く見られた。
- **専門家から**
子供たちそれぞれの個性や考えが表れていた。問いかけや環境、場所によって活動が大きく変わる。子供同士の関係が深まって、会話も多かったように感じられた。

活動③ ～心臓の音を聞いてみる～

活動②で心臓の音へ特に興味を持っていた子供たちの姿から、身体の中でも心臓の音に集中して聞いてみる活動を行った。

環境をデザインする

- 準備した物 聴診器、糸電話、絵の具、画用紙、筆、マジックペン

探究活動を実践する

● 活動内容

「心臓」について様々な問いかけをした後、心臓の音を聴いた。

● 子供たちの様子

- ・ 「心臓」についての問いかけでは、以下のような声が上がった。
- ✓ 「心臓って知ってる？」
⇒ 「胸にある」「心臓がないと死んじゃう」
- ✓ 形や色、大きさ
⇒ 「丸い」「ハート」「心臓は血をためているから、赤」「黒」「ピンク」「大きさはこぶくらい」
- ✓ 気持ちによる「心臓」の変化
⇒ 「泣いているときは水色になる」「緊張するとドキドキする」「怒っているときはドキドキ」「ドクドクしなくなると元気がなくなる」
- ・ お互いの心臓の音を聴診器で聞き比べ、「なんで音が小さいんだろう？」「背が小さいとドクドクも小さい」など、音の大小について考えを深めた。
- ・ 子供たちそれぞれがイメージしている心臓を絵に描いた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 子供たちは、心臓の音を「ぐるぐる」「がざがざ」「どんどん」など様々な言葉で表現していた。
- ・ お互いの意見を認め合う姿が印象的だった。

活動④ ～虫の心臓の音を聞いてみる～

「虫には心臓があるの？」という子供たちの言葉をもとに、園庭にいる虫の心臓の音を聞いた。

環境をデザインする

- **準備した物** 聴診器、糸電話、絵の具、画用紙、筆、ビニールシート、半紙、色画用紙

探究活動を実践する

● 活動内容

園庭で、聴診器や糸電話を使って虫の音を聴き、聴いた音を絵に描いて表現した。

● 子供たちの様子

- ・「ダンゴムシはドクンって音がすると思う」「オスとメスで心臓の音は違うと思う」「女王ありなら聞こえるはず、ばくだんみたいにバーンって音がするはず」「音は聞こえなかったけど動いてたから、捕まえられて死んだふりしてたんじゃない？」など、様々な仮説を立てながら、虫の音を聴くことを試していた。
- ・みんなで集まって見つけた音を共有する姿が見られた。
- ・聴いた音を絵で表現した際には、「ちょうちよの心臓の色は薄い紫」「虫の心臓はさんかく」など、子供たちがイメージした様々な虫の心臓が絵に表れていた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

探究活動を通して、みんなで一つの目的を持って、普段関わらない子と一緒に遊べる時間が貴重だと感じた。

● 専門家から

- ・子供たちの「知りたい！」という好奇心から、集中できた時間になっていた。
- ・グループになって活動することで他の子のいいところを発見したり、今までにない考えと出会うことができている。

テーマを設定する

子供たちが日頃から音に興味を持っているため、身近な音に気づき、「この音は何だろう？」という問いをもとに、聞こえてくる様々な音を表現する中で興味を深めていくことを目的とした。

活動① ～音探し1～

屋外にある音について、音探しを展開した。

環境をデザインする

- 準備した物 スマートフォン（音の記録用）

探究活動を実践する

- 活動内容
公園内を歩きながら、様々な音を探した。
- 子供たちの様子
・「柔らかい木はバキッと音がしない。硬い木がいい」「太陽が近いから（葉っぱが）バリバリってなる」など、どのような物であれば音が鳴るかどうかにして様々な仮説を立てていた。
・落ち葉をちぎると音がすることを発見し、「おにぎりの音」などと表現していた。
・枝で作った形を妖怪に見立て、「ひとつめ小僧はこういう音」など、その場にはない音も想像していた。

活動スケジュール（3歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 音探し1	25分程度	3人
② 音探し2	25分程度	5人



振り返りをふまえた気づき

- 園の先生から
・子供たちの活動的な姿に驚いた。
・子供たちが、葉っぱなどの音を「声」と表現していたのが印象的だった。

活動② ～音探し2～

前回の活動後から、普段から室内などで音探しを楽しむ姿が見られるようになった。そこで、活動①とは異なる公園で再度、音探しを行った。

環境をデザインする

- 準備した物 スマートフォン（音の記録用）

探究活動を実践する

● 活動内容

活動①と同様、公園内を自由に歩きながら音を探す一方、静かに座ってみんなで集中しながら音を聴く時間も設けた。

● 子供たちの様子

- ・ ムクロジの実を振って、「カチカチ」と音がすることに気づいた。
- ・ 木の枝で、別の木を叩いて音を比べていた。
- ・ 「穴を掘ったら音が聞こえるかも」と、木の枝で穴を掘り、音を探していた。
- ・ 大きい石と小さい石を川に投げ、音の違いを聞き比べた。
- ・ 静かに座って音を聴いたことで、「鳥の声がひよひよって聞こえた」「遠いのお友達が遊んでいる声が聞こえる」など、新たな発見をしていた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 普段の生活の中で気づかないような音についても、この活動がきっかけになって、「これってなんの音だろう？」と聞くようになるだろう。
- ・ 穴を掘って音を聴こうとするなど、子供たちはどこから音がするか分からないからこそ、様々なことを試しながら音を探していた。

テーマを設定する

普段の保育の中で、保育室に差し込む光や、水遊びの時に水に反射する光、屋根に映る木の影などに0歳児が興味を示す姿が多く見られていたことから、光をテーマとした。

活動① ～水面の光 1～

「光ってなんだろう？」という問いをもとに、光と水の関係性を探ることをねらいとした活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 白い布、正方形の水槽、水
- ✓ 屋外にて、水を入れた水槽の下に白い布を敷くことで鏡のように映り、屈折が起きる。子供たちの興味を引くことができるよう、シンプルな環境を設定した。
- ✓ 0歳児の活動では、その日の子供の機嫌や、月齢による生活リズムの違いがあるため、グループ分けは流動的にした。

活動スケジュール（0歳児クラス）

活動内容		時間/回	人数/回
①	水面の光 1	10分程度	2人
②	水面の光 2	40分程度	自由
③	光と白い紙	40分程度	自由
④	落ち葉に出会う	40分程度	自由
⑤	光と落ち葉の探究	60分程度	8人



探究活動を実践する

● 活動内容

テラスにて水を入れた水槽を用意し、水と光の様子を探究した。

● 子供たちの様子

- ・子供たちが自分から手を使って水面を揺らしたり、先生が水をすくい上げる様子を真似したりする様子が見られた。
- ・指の動きによって水の揺らぎが変わることを発見し、そっと優しく触っていた。
- ・先生の手から滴り落ちる水がどこから出てくるかを探るように、一生懸命見ていた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・普段動きがゆっくりである子供の視線に合わせて動きを注意深く見てみると、水滴が落ちた場所に目線や手を動かすなど、ちょっとしたことに気づいていたことに驚いた。その子なりによく考えて動いていることが分かった。
- ・環境を工夫することで、普段の水遊びとは違う保育ができることが分かった。

● 専門家から

水面の揺れ、水のしずく、水の揺らぎなど、水の動きを細かく感じ取り、一人ひとりが考えながら水を探究していた。



活動② ～水面の光 2～

活動①と同様の水槽を屋内に用意し、様々な光を当てながら水を探究した。

環境をデザインする

- **準備した物** 白い布、正方形の水槽、水、トレース台、卓上ライト

探究活動を実践する

- **活動内容**

水を入れたアクリルの水槽をトレース台の上に設置し、周囲から卓上ライトで光を当て、水の様子を観察した。

- **子供たちの様子**

- ・ 水や光の見え方が屋外と違うことに気づいたためか、水槽を上から見て中をのぞき、下からも見上げるなど、より注意深く観察していた。
- ・ ペットボトルを水の中に入れてと浮力で浮き上がるということを発見し、何度も繰り返し試していた。途中でペットボトルがつぶれても、そのまま水の中に入れてみるなど、長時間集中している様子が見られた。
- ・ 前は躊躇うことなく大胆に水を触っていた子が、今回は静かに水をよく見て手をそっと動かしていた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**

- ・ 日頃から動きが活発な子は全身で体感し、いつも考えながらよく見て動く子は、一つずつ確かめながら慎重に探究するといった違いが見られた。
- ・ 長い時間一人で水を探究する様子に驚いた。
- ・ 子供を見ることを大切にするために言葉を少なくして関わったことで、子供の言葉が聞こえたような気がした。

- **専門家から**

水と光を探究する機会と時間をゆっくり与えられたことで、自分から手を伸ばして触れるなど、子供自身のタイミングで参加することができた。

活動③ ～光と白い紙～

光と紙の関係性を探るといふねらいを持って、室内にて様々な種類の紙に光を当て、光と紙について探究した。

環境をデザインする

- **準備した物** ライトテーブル、OHP、卓上ライト、様々な種類の紙（和紙、トレーシングペーパー、不織布など）
- ✓ 壁に模造紙を貼り、床やライトテーブルの上には光の透過性が異なる紙を数種類配置した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
様々な種類の紙に、トレース台、卓上ライト、OHPなどの光を当て、自由に紙に触れながら、光と影の様子を探究した。
- **子供たちの様子**
 - ・ OHPで壁に投影された紙の影や、床に映る紙の影に興味を持つ様子が見られた。紙を動かすことで影が動くことを発見し、紙を持ち上げたり下げたりと何度も試す様子が見られた。
 - ・ 筒状の丸めた紙に興味を持ち、手を入れたり、丸めた紙を開いたり閉じたりしていた。
 - ・ 紙を動かすことで出る音に気づいたり、紙の感触の違いを確かめるように触り、よく見たりするなど、感覚を通して紙を探究する姿が見られた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・ 0歳児にとっては、大きな紙に自由に触れる初めての機会であった。
 - ・ 普段は子供に対して声かけすることを心掛けていたが、言葉ではなく、表情やアイコンタクトで一つ一つ伝えていく大切さを学んだ。
- **専門家から**
子供が何をしようとしているか、何に興味を持っているのか、どんな感覚でいるのか、何を思っているのかを考えることが重要である。

活動④ ～落ち葉に出会う～

テラスにて、たくさんの落ち葉と触れ合う活動を行った。

環境をデザインする

- 準備した物 複数種類の落ち葉

探究活動を実践する

● 活動内容

様々な色や形の落ち葉をテラスに並べ、落ち葉について探究した。

● 子供たちの様子

- ・ 指をうまく使って葉っぱを細かくちぎっていた。
- ・ 葉の表裏を見たり、枝を見たり、指全体で触るなど20分もの間、1枚の葉っぱと触れ合っていた。
- ・ 葉っぱを次々と手に取ってにぎりながら、音や感触の違いを試していた。
- ・ 2つの葉をすり合わせ、葉をつまんで確認しながら考えている様子が見られた。
- ・ 足に力を入れながら葉をちぎったり、しゃがんで葉っぱを上へ投げたりするなど、全身を使って遊ぶ姿が見られた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 葉っぱで遊ぶというと、顔を作ったり、ひらひらと動かしたりするだけであったが、この活動では手足を使い、音でも遊ぶ子供の姿を見ることができた。
- ・ じっくり葉っぱで遊ぶことは今までなかったので、いい経験であった。

● 専門家から

0歳の子供たちも生まれながらに持っている力がある。環境を丁寧に設定することで、子供たちは自分たちで選び、行動を起こすことができる。

活動⑤ ～光と落ち葉の探究～

子供たちが、窓に反射する自分をよく見ていた姿から、葉っぱと光の反射に対する興味を深めるといふねらいを持って、活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** ミラーシート、複数種類の落ち葉、卓上ライト

探究活動を実践する

● 活動内容

床に敷いたミラーシートの上に落ち葉を並べ、卓上ライトで照らしながら落ち葉を観察した。

● 子供たちの様子

- ・ 葉っぱを細かくちぎって並べていた。
- ・ 葉っぱにライトを当て、葉っぱの見え方が変わることを発見していた。
- ・ 足の指の間に葉っぱを挟む、葉っぱの匂いを嗅ぐ、あごの下に挟む、指の間に挟む、頭に乗せるなど、長時間集中して様々なことを試していた。
- ・ 活動に使った葉っぱや子供たちがちぎった葉っぱは、日常の中でも探究活動を続けられるよう、子供たちが手に取れる棚に置くことにした。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

これまで様々なものに触れる活動をしてきたことから、散歩に行った時も子供たちの葉っぱの触り方が今までと違ったように見える。経験をつみ重ねたからこそ、一つのものとじっくり向き合っていた。

● 専門家から

子供たちが自分から出会っていくこと、自分から手を伸ばすことを大切にしたい。子供がどういう動きをして、その動きを私たちが理解して、タイミングを図って葉っぱを渡したり、ちょっと離れて見守ったりすることが、子供の探究を支える上で重要である。

テーマを設定する

園の特色として国語力（聞く力、話す力、表現する力）の獲得を掲げており、様々な感情を経験する一つの方法として絵本を活用している。

今回の活動では、5歳児クラスが興味を持っている絵本の物語を題材に活動を展開した。

活動① ～絵本の世界を描く・冒険する～

子供たちが好きな絵本の世界を、クレヨンや絵の具を用いて、部屋に広げたロール紙いっぱいに表現する。

環境をデザインする

- **準備した物** ロール紙、クレヨン、絵の具、筆
- ✓ 子供たちが絵本の世界を思う存分表現できるよう、長いロール紙を使用した。
- ✓ 子供が描きたいものに合わせて、道具を自由に選べるよう、クレヨンや絵の具、数種類の筆など様々な道具を準備した。

活動スケジュール（5歳児クラス）

活動内容		時間/回	人数/回
①	絵本の世界を描く・冒険する	60分程度	4人
②	これまでの活動を共有する・冒険する	60分程度	12人
③	てのひらスタンプ	60分程度	6人
④	光の探究	60分程度	4人
⑤	替え歌の世界を表現する	60分程度	5~6人



探究活動を実践する

● 活動内容

- ・ 導入として、子供たちに問いかけながら絵本のストーリーを改めて振り返った。
- ・ 物語の内容をもとに、絵本の冒険の世界を自由に想像し、絵で表現した。

● 子供たちの様子

- ・ 「星描くね！」「魚も描こう」「いいね」「協力して描いてる！」など、グループで協力し合いながら一つの世界を作り上げた。大きなロール紙に絵を描くことで、お互いの絵が繋がり、新しい物語が生まれていった。
- ・ 絵を描いた後は絵の上を実際に歩きながら、「海」「飛び岩」「滝」など、子供たちが描いたものをみんなで共有し、表現した世界を冒険する気分を味わった。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 最初はできない、と言いながらも、描き始めるとイメージがわいてきて止まらなかった。
- ・ 活動後の子供たちの表情がよく、子供たちからも「楽しかった！」という声があった。

● 専門家から

- ・ クラス全体で同じ絵本の物語を共有している分、絵本からスタートし、離れて、またどこかでクロスして、と大きな物語が一つの足場になっていた。
- ・ グループによって活動の始め方が異なり、物語を覚えている子、覚えていない子、とにかく体を動かしたい子、絵を描き込みたい子など、グループの組み合わせによって引き出されることも異なる。このグループはどんなスタートであれば絵を描く活動に進みやすいのか、子供たちとのやり取りの中で、探っていくことが大事である。



活動② ～これまでの活動を共有する・冒険する～

活動①で描いた絵を部屋に投影して振り返りながら、全身を使って絵本の世界を味わった。

環境をデザインする

- 準備した物 プロジェクター、ウレタン積み木など

探究活動を実践する

- 活動内容
 - ・ 最初はプロジェクターに近寄ったり遠ざかったりすることで、スクリーンに映る影を発見するなど、光と影の変化を楽しんだ。
 - ・ その後、子供たちが描いた絵をスクリーンに投影した。各自が描いた絵を説明し、投影された絵を見ながら自由に遊んだ。
- 子供たちの様子
 - ・ 絵を動かしながら投影したり、雨の音をスピーカーで流したりするなどの工夫により、臨場感の中で子供たちはそれぞれが描いた絵の世界に引き込まれていった。
 - ・ 「冒険したくなっちゃった！」という子の言葉から、ウレタン積み木などの素材を出したことで、投影した絵とウレタン積み木などを組み合わせながら、「家」や「りゅう」など、絵本の世界を独自に作り出していた。



振り返りをふまえた気づき

- 園の先生から
 - ・ プロジェクターの光によって何かが映るといのが子供にとっての発見であり、スクリーンがなくても映っていることにも驚いていた。
 - ・ 映像や写真を映さなくても光だけで遊んでいた。プロジェクターと大きいスクリーンを使って、光で遊ぶこともやってみたい。

活動③ ～てのひらスタンプ～

活動①の中で絵の具を用いた表現に子供たちが強い関心を示したため、絵の具を使った活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 模造紙、動物の毛筆、絵の具（赤、青、黄）、ブルーシートまたはビニールシート、トレー、バケツ
- ✓ 子供たちが筆に親しみを持てるよう、本物の動物の毛で作られた筆（羊、馬、豚、たぬき、りすなど）を使用した。
- ✓ グループによって、模造紙の下にブルーシートまたは透明のビニールシートを敷いた。ブルーシートは海に見立て、ビニールシートは天井への光の反射を楽しむなど、準備した物によって異なる遊びが展開された。

探究活動を実践する

- **活動内容**
 - ・ 導入として、子供たちにとって身近な動物の毛を使った筆の触り心地を肌で体感した。
 - ・ 手や足に3色の絵の具をつけて、模造紙を繋げた大判の紙へ自由に手形や足形を押した。
- **子供たちの様子**
 - ・ 3原色のみでの絵の具を使って友達と握手などで触れ合い、色が混ざることを経験した。違う色をつけた子と握手をすることで、普段関わりが少なかった子とも関わるきっかけができた。
 - ・ 活動が進むにつれ、てのひらだけでなく、手の甲や足の甲、腕、顔、お腹なども使いながらスタンプを押すことを楽しんだ。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・ 最初は絵の具は手だけでいいと言っていた子ども、気づいたら足に塗ったり、誰よりも最初に顔に描き始めたりと、活動を楽しんでいた。
 - ・ 前回までの活動が子供たちの中で経験として積み重なっていて、自信になっている。体が自由に動くようになり、表現することを楽しんでいた。

活動④ ～光の探究～

活動②において子供たちがプロジェクターで映し出された光と影に強い関心を示していたため、光を用いた探究活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 懐中電灯、シーツ、プロジェクター、カラーセロハン、卓上ライト
- ✓ 天井からシーツを吊り下げ、スクリーンのように使用した。

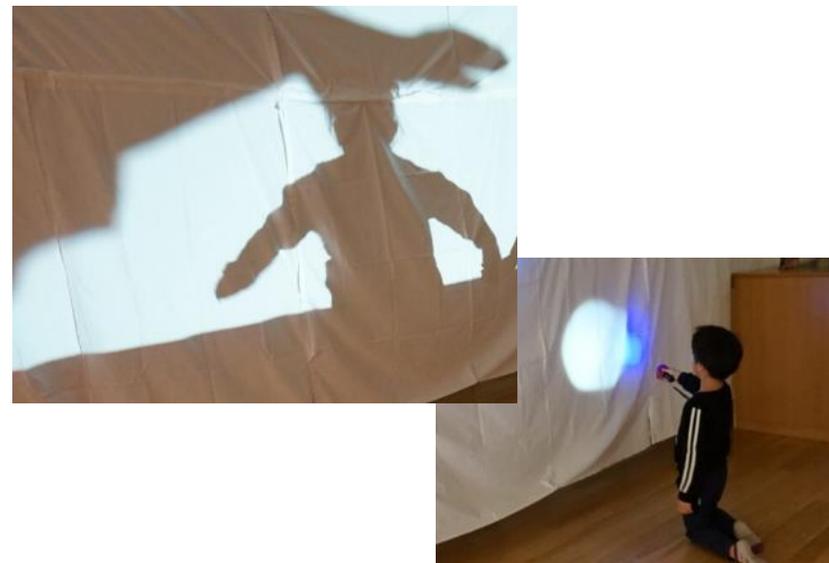
探究活動を実践する

● 活動内容

導入として先生が劇を準備した。カラーセロハンを貼った懐中電灯の光をスクリーンに当て、黄色と赤の光が重なる演出により、子供たちは色が変わることを発見し、「きれい！」という声が上がった。その後、スクリーンに映る光や影で自由に遊んだ。

● 子供たちの様子

- ・ プロジェクターの光を使った影遊びでは、自分が動くと影の大きさが変わることを楽しんでいた。
- ・ プロジェクターにセロハンを重ね、青や緑の世界を作ると「海だ！」「草、気持ちいい！」と色の世界を楽しんでいた。
- ・ セロハンを貼った懐中電灯を使い、スクリーンや天井に光を当てたり、光を重ねることを楽しんだ。さらに、セロハンを重ねると色が変わったり濃くなったりするのを発見していた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

活動②で光を楽しんでいる子供の姿を見て、シンプルに光を体験させてあげたかった。セロハンやライトで遊んだのは初めてで、子供たちは真剣な表情をしていた。

● 専門家から

- ・ 光、セロハン、懐中電灯というシンプルな素材でも、子供たちはいろんな世界を楽しんでいた。
- ・ 普段の姿から、どうしたら子供たちが喜ぶかを考えながら、先生が素材を選んだり、何ができるかを考えて活動を進めていたので、子供たちがとても夢中になっていた。

活動⑤ ～替え歌の世界を表現する～

園の行事で披露した替え歌の歌詞からイメージを膨らませて、子供たちオリジナルの物語を作り、これまでの活動で使用した絵の具や光などを使って替え歌の世界を表現する。

環境をデザインする

- **準備した物** ビニールシート、ロール紙、カラーセロハン、模造紙、筆、絵の具、蜜蝋クレヨン、ローラー、ウレタン積み木、卓上ライト、懐中電灯

探究活動を実践する

● 活動内容

- ・ 事前に替え歌の内容をもとに、どんな世界を表現したいかについてアイデアを出し合った。
- ・ 大きな紙やウレタン積み木などを使って、子供たちが想像する替え歌の世界を作り上げた。

● 子供たちの様子

- ・ 絵本の世界に関連した替え歌を作ったグループは、絵本の世界の「街」を作ることをテーマに、赤、青、黄の3色の絵の具から次々と色を作り、畑や果物、虹などを描いていた。
- ・ 描いた絵を畑や道に見立てながら街全体をイメージし、積み木で「三角屋根のおうち」を作る、「りゅう」を作って一緒に遊ぶ、跳び箱を「りゅう」になりきって飛ぼうとする、など子供たちは様々な表現や動きによって、「街」の世界を表現していた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

子供たちと事前にイメージを具体化していたので、自分から次々と躊躇なく楽しみながら絵を描いていた。

● 専門家から

- ・ 大きな紙に絵を描くのは、大人でも戸惑うが、子供たちは活動を通して表現する力がついてきている。
- ・ この活動にはゴールがないからこそ、やればやるほどさらに活動が広がっていき、子供たちもわくわくしながら活動できる。

テーマを設定する

子供たちが、絵の具で色を塗ることが好きであることから、色遊びを楽しんだり、個人で色作りを楽しむ過程で探究に取り組むため。

活動① ～きれいな色～

子供たちがよく使う「きれい」という言葉に注目し、「きれい」な色を3つ選び、グループごとに大きな模造紙の上で「きれい」な色を作った。

環境をデザインする

- **準備した物** 模造紙、筆、絵の具、テーブルクロス、パレット

探究活動を実践する

● 活動内容

- ・「きれいという言葉をごんな時に使うのか」や「なぜきれいと感じるのか」という問いかけを行い、子供たちの言葉を聴いた。
- ・その後、絵の具から3色、数種類の筆から好きな筆を選んで1枚の大きな紙の上で混色に取り組んだ。

● 子供たちの様子

- ・「きれい」なものとして、「幼稚園」「青」「リボン」「オレンジ」などの意見が出た。
- ・混色では1枚の模造紙の上で次々と色を作り、さらに他の友達が作った色を混ぜ合いながら新たな色が生まれていた。

活動スケジュール（4歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① きれいな色	30分程度	4人
② あたたかい色	30分程度	4人
③ 子供たちと色	30分程度	4人



振り返りをふまえた気づき

● 専門家から

- ・「かわいい」ではなく「きれい」という言葉は、とても繊細な言葉である。
- ・「白は心があたたまる色。いちばん優しいから」という言葉が子供たちから出てきた。次回はこの「あたたかい」をテーマとしたい。

活動② ～あたたかい色～

活動①における「白は心があたたかくなる」という言葉から、「あたたかいとはどういうことか」「あたたかい色とはどんな色か」を探究した。

環境をデザインする

- 準備した物 ミニキャンバス、絵の具(7色)、筆

探究活動を実践する

● 活動内容

「心があたたかくなる瞬間」についての考えを出し合った後、ミニキャンバスを一人一つ準備し、その上で2色を使った混色をしてもらい、「あたたかい」色を探った。

● 子供たちの様子

- ・「心があたたかくなる瞬間」について、「人形と寝る時」「狼を考える時」「うさぎを見ている時」などの言葉が出てきた。
- ・ミニキャンバスに塗っている時、「水色が多い」と言って色の量を調整したり、「ぐるぐる」と言いながら筆を回転させて色を塗ったりする姿が見られた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・「あたたかい」と聞くと「暖色系」を考えてしまうが、水色が並んでいたのが意外だった。
- ・自分の生み出した色だからこそ、愛着が生まれて「あたたかい」になったのかもしれない。

● 専門家から

- ・単に「あたたかい」という言葉よりも「心があたたかくなる」という表現の方が、子供たちにとって分かりやすい様子だった。
- ・「キウイみたい」「ブルーベリーみたい」とお互いの色について言い合える関係が見えた。

活動③ ～子供たちと色～

「白色を混ぜることで色が薄くなる」というある子の言葉から、パステルカラーを作る準備をし、混色を探究した。

環境をデザインする

- **準備した物** パレット、筆2種類、ミニキャンバス（黒と白、活動②より一回り大きいサイズ）
- ✓ 活動②における「黒も心あたたまる色」という言葉から、白の他に黒のキャンバスも準備した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
黒または白のキャンバスと、好きな色の一つを選んでもらい、白色との混色に取り組んだ。
- **子供たちの様子**
 - ・「（色を）混ぜた時に、白になったり違うようになったりいろんな変化があるのが面白い」という言葉や、「いい色になった」「きれい」といった言葉が多く聞かれた。
 - ・キャンバスの端から塗り始める子、真ん中に大胆に絵の具を置いて塗り始める子、何度も重ね塗りをする子、と各々の塗り方に多くの違いが見られた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・塗り終わった後に、「こういうのになった」「友達の色いいね」とお互いの色を共有して振り返る姿が見られた。
 - ・一人ひとりが色を通して「きれいさ」に心が動いている様子が見られた。
- **専門家から**
 - ・淡い色になったからか、「かわいい」という言葉も出ていた。
 - ・混色の経験を重ねることで、様々な色を合わせて自分が想像している色を作れるようになるだろう。

テーマを設定する

発表会の劇を通じて子供たちが興味を持った「じごく」についてさらに探究を深めるため。

活動 ～自分にとっての「じごく」と「てんごく」とは？～

劇のテーマである「じごく」と「てんごく」について考えを深めてから、様々な素材を用いて自分にとっての「じごく」と「てんごく」を表現した。

環境をデザインする

- **準備した物** A4用紙、黒ペン、ライトテーブル、OHP、卓上ライト、散歩の際に子供たちが集めた自然物、様々な素材（身近なリサイクル素材など、光を通すものや通さないものを準備）

活動スケジュール（5歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
自分にとっての「じごく」と「てんごく」とは？	60分程度	4～5人



探究活動を実践する

● 活動内容

導入として、「じごく」と「てんごく」について問いかけを行い、自分にとっての「じごく」と「てんごく」を紙にペンで書いてイメージを膨らませた。その後、ライトテーブルの上や木の板の上で様々な素材を自由に組み合わせて、「じごく」と「てんごく」を立体的に表現した。

● 子供たちの様子

- ✓ 「じごくってどんなところ？」⇒「悪い人が死んだら行くところ」「鬼がいっぱいて怖い」
- ✓ 「てんごくはどんなところ？」⇒「てんごくはやさしい国」「みんなを見守れる」「安心する」
- ・ 子供たちは素材を次々に手に取り、「これは何？」「どうやって使うの？」と疑問を持ったり、ライトテーブルやOHPなどに素材を置いて、光の透過性など、素材の特性を確認していた。
- ・ 赤い落ち葉を「マグマの色」に見立て、素材からイメージを膨らませたり、針がたくさんある「じごく」を表現するために先の尖った段ボール紙とドングリを使ったりするなど、自分の表現に合った素材を活用しながら、「じごく」と「てんごく」の世界を表現した。
- ・ お互いの作品について、「ここはどんな場所？」と話しながらそれぞれが作った世界を共有していた。また、活動後には作った「じごく」と「てんごく」を子供たち自らカメラで撮影した。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

日々の保育園生活では集団での活動が多く、じっくり活動しながら子供にも大人にもゆとりがあるという経験はなかなかできなかった。

● 専門家から

素材を様々な光を通して見つめ、それがどんなものなのかを自分自身で確かめ、様々な発見をしていた。普段気にしていなかった身の回りのものの魅力や自分の好きなものを発見していたように見えた。



テーマを設定する

園における様々な遊びや生活の中で、高さや長さ、重さに興味関心を持ち、「はかる」活動を行っていたため、「はかる」をテーマとした。

活動① ～水の量をはかる～

長さや重さに比べてはかることが難しい水の量について、子供たちがどうやってはかるかをねらいとして、水の量をはかる活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** ベビーバス、ママごと道具、鍋などの調理用品、砂
- ✓ 園庭で遊んだ後に、ママごとの道具などをベビーバスに入れて洗っていたことから、子供たちが普段使用している道具を使った活動を展開した。

活動スケジュール（4歳児クラス）

活動内容	時間/回	人数/回
① 水の量をはかる	50分程度	20人
② モビールで重さをはかる	60分程度	4人
③ 塗る・結ぶ・飾る	60分程度	4人



探究活動を実践する

● 活動内容

土と水を入れたベビーバスを2つ用意し、それぞれにままごとの道具、土と水、水が入ったポリタンクなどを入れ、ベビーバスに入っている水の量の違いを推測した。

● 子供たちの様子

「どちらの方がお水がいっぱい入っている？」と子供たちに問いかけると、水の量を「はかる」ための様々なアイデアが出た。

- ✓ ベビーバスの水を地面に流して、どこまで水が広がるかを見て比べる
- ✓ ベビーバスを持って重さをはかる⇒「力持ちの人が持ったら軽いと思っちゃう」
⇒力持ちの子たちに持ってみてもらう⇒どちらが重いかについて意見が割れた
- ✓ 穴を掘って水だけ出してみる⇒「土が水を飲んじゃう」
- ✓ 他の容器で水を汲んで比べる
- ✓ 入っている道具をすべて出してみ、水の深さを比べる

など、子供たちがそれぞれの意見を出し合いながら「はかる」について考えを深めた。



振り返りをふまえた気づき

● 園の先生から

- ・ 普段からたくさん遊び込んでいるからこそ、「こうしたらこうなるだろう」と想像し、考えることができていた。
- ・ すぐに結論は出ないが、ああでもない、こうでもないと考えるのがいい時間だった。

● 専門家から

- ・ 答えや正解があって子供たちがたどり着くかではなく、子供たちがどういう風に考えているかが大切。
- ・ 子供たちが緊張せずに意見を出せることに感動した。
- ・ 正解を分かること以上に、その子なりのはかり方を獲得することに意味があると思った。正解がない活動をいかに子供たちがやりたくなっていくか、子供なりの答えを出したくなるかを考えて、活動を組み立てていきたい。

活動② ～モビールで重さをはかる～

「はかる」の中で「重さ」に焦点を絞り、モビールを作る活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 大きめの木の枝、ロープ、松ぼっくり、毛糸など

探究活動を実践する

- **活動内容**
木の枝で作ったモビールを利用して様々な物を枝の両端に吊るしていく活動を行った。
- **子供たちの様子**
 - ・物をモビールの左右どちらにかければ水平になるか、子供たちは思い思いの方法で試しながら一生懸命考えていた。
 - ・木の枝が上がっている側を「勝っている」、下がっている側を「負けている」と表現し、「負けている」方に物をつるそうとする様子が見られた。



↑子供たちが作成したモビール

振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・重さに着目するよりも、飾り付けをする感覚で活動を行っていた。
 - ・普段よりも積極的に意見を出す子供の姿も見られた。
- **専門家から**
 - ・子供たちが普段から遊び込んでいるからか、ぶつからずに、道具の譲り合いや意見の出し合いができていた。
 - ・毛糸などの素材を使う際は、子供の芸術的な表現を励ますと考えて、子供が満足するまで遊び込めるよう、ふんだんに素材を与えることが重要である。

活動③ ～塗る・結ぶ・飾る～

活動②において「重さ」「バランス」よりも「飾り付け」に子供たちの関心が向いていたため、吊るし飾りを作る活動を行った。

環境をデザインする

- **準備した物** 蜜蝋クレヨン、円形紙のコースター、リボン、モール、大きめの木の枝、ロープ、モール、リボン
- ✓ 四角い紙ではなく、円形の紙に穴を開けることで、絵を描くことよりも色を塗ることを楽しめるよう準備した。

探究活動を実践する

- **活動内容**
 円の中心に穴を開けたドーナツ型の紙に、蜜蝋クレヨンで色を塗った。また、前回の活動で「結ぶ」動作に苦戦する子供がいたことから、吊るし飾りにリボンを自分で結びつける作業も加えた。
- **子供たちの様子**
 - ・ 思い思いの色を塗り、色を重ねることを楽しんでいた。
 - ・ リボンを結びつけることが難しい子も、友達に手伝ってもらったり、友達を真似して挑戦するなどして結べるようになっていた。
 - ・ 「グラグラゲームだ！」という発言から、みんなが水平にするよう意識しはじめ、水平になった瞬間は全員で大喜びしていた。



振り返りをふまえた気づき

- **園の先生から**
 - ・ 子供にとっては長い活動であるにもかかわらず、1時間のめりこんでいた。
 - ・ 色を塗る際、躊躇したり他の子の真似をしたりする子がいなかった。
- **専門家から**
 - ・ それぞれが自分の意志をはっきり持って、使いたい色を選んでいました。
 - ・ いきなり描いてごらん、というプレッシャーになってしまうので、「何色が好き？」など、安心できるように声がけすることを心掛けるとよい。

海外における探究活動の事例

海外における子供の探究心や好奇心を育むための実践の一部をご紹介します。

レッジョ・エミリア市は、自治体が保育・幼児教育の良い質を支援し、維持することに成功している。レッジョ・エミリア市の幼児教育は、探究的なプロジェクトをベースとしており、創造性と市民性の優れた教育として世界的に知られている。



↑街中に掲げられた子供たちの言葉



✓ デジタル機器の活用

スコープ、PC、カメラなど、デジタル機器が多く用意されており、活動の中で子供が自由に活用できる。デジタル機器の使い方次第で、新たな発見をしたり、子供の表現の方法を生むことができる。（Malaguzziセンターのアトリエより）

✓ 素材や道具

廃材を再利用した素材や、様々な道具を探究プロジェクトに使用している。（Malaguzziセンターの展示より）

✓ 『怪物の探究プロジェクト』

- ・ 5歳のJは多動の傾向があり、知的な発達もゆっくりらしい子である。（現地では「特別な権利を持っている子」と表現）
- ・ 「怪物を描いてみよう」という先生の提案に、Jは走って紙を取りに行き、鏡の前で怖い顔を確認しながら、「怖い怪物を描く！」と言って描き出す。描き上がった絵を先生に見せると、「なんて怖い動物！すごい！」と先生は言う。Jは喜んで、2枚目の絵を描く。「怪物」が二匹縦に並んだ絵を先生に見せるが、「先生、見て！怖いよ！でも手足を描いて、靴をはかせたら、怖くなくなっちゃった…」と言う。「そうね、怖くないわね」と先生が言う。
- ・ すると、絵が得意なKが、胴体から三つの頭が出て火を噴いている竜を描いた自分の絵をJに見せる。Jは「頭がいっぱいと、怖いんだ！」と気づき、黄色のクレヨンで頭を五つ描く。さらに、Lが「怖い色は、赤・青・黒よ」と囁く。それを聞いて「黒いのが、一番怖いよ」と隣の席のMが呟く。Jは黒い頭を画用紙の真ん中に描き込み、画用紙の下に、連なった“A”の文字を描いて「出来た！」と先生に絵を見せる。「頭がいっぱいね！」の先生の発言に対し、「一、二、三…、七つもあるの！」「七つ！怖いわ！」と先生が言うと、「アーって叫んでるの！」と“A”の文字を指す。「わー、言葉みたいにくっ付いているのね」と先生が感心すると、「そうなの！アーアアアー！」と得意になってJは叫んでいた。

- ・ 「特別な権利を持つ子供」も、そうでない子供と一緒に探究活動を行う中で、「違い」を新しい「価値」として捉えている。
- ・ 先生は話して教える役ではなく、**子供に問いを投げかけ、子供の言葉に注意深く耳を傾けながら受け止める**役に徹している。これにより、子供は「先生は自分の言うことを聴いてくれる、自分を受け止めてくれる」と感じ、自分の言葉で活発に語り掛けることができている。
- ・ 「怖くなくなっちゃった」というJの発言を先生が受け止め、感情を肯定することで、J自身が彼の気持ちに気づききっかけとなった。また、Jの様子を見たK、L、Mなど周囲にいた友達言葉と関わりによって、Jの新たな表現が生まれた。

⇒「探究」における子供たちの問いが他者との「協働」を促し、「創造性」が発揮されていく。

他園における探究活動の事例

園の日常における子供の探究心や好奇心を育むための実践の一部をご紹介します。
東京都は「探究活動」を通じて、幼児教育・保育の充実に取り組む園を支援していきます。

砂の山を作る

✓ 何度失敗しても、遊ぶ過程そのものを楽しむ

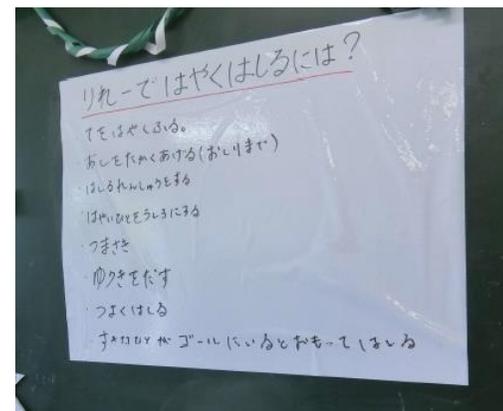
子供たちが、底に穴をあけてひっくり返したバケツに砂と水を入れながら、砂の山を作ることに挑戦し、バケツを取ると山が崩れてしまった。そこで、「水が足りなかったみたい」と気づき、水を運ぶ容器を大きいものに変え、入れる水を増やした。再度、山が崩れてしまうが、子供たちは何度も山作りを続けていた。



リレーの物語

✓ 仮説を立て、皆で話し合いながら試行錯誤する

いつも先生が準備していたリレーのコースを、子供たち自身で描いてみる。子供たちがチョークでラインを引き始めるが、普段のコースと自分たちが描いたコースがずいぶん違うことに気づく。走ってみると、「ちいさいね」「もっと大きくしよう！ 曲がるのが早すぎた！」などの発見をしていた。



✓ クラス全体で一つの目標に向かって協力し、意見を出し合う

さらに、リレーで勝つためにクラスみんなで意見を出し合い、どうすればもっと速く走れるかを探究する。腕を大きく振る、足を高く上げる、勇気を出す、など様々な意見が出た。



積み木

✓ 何かを成し遂げるためではなく、ただ遊びに「没頭」する

何かを作ることを目的とするのではなく、ひたすら「もの」と対話しながら積み木を重ねることを楽しんでいた。

光と影の部屋（ミニアトリエ）

✓ 一人ひとりの興味関心をもとに、好きなタイミングで自由に遊ぶ

部屋の一角に「光と影の部屋」と呼ばれる薄暗いアトリエを常設しており、子供たちは光（色）と影をテーマにした自由な遊びができる。

<遊びの例>

- ・ ライトテーブル上での砂絵、カラーアクリル積み木遊び。
- ・ アルミホイルや透明な容器など家庭にあるものをマテリアル（素材）としてそろえ、ライトで照らして色の調和をしたり、OHPで大きく投影する。
- ・ 天井からつるした布のスクリーンに、プロジェクターの光を通して物や人物を投影し、影絵や映画ごっこなどの遊びを展開。

アクリル板の下に光を通す布を張り、上からライトを照らし、下からスマートフォンのカメラで写しながらプロジェクターに接続すると、板の上に置いたものをスクリーンに投影できる。



アスレチック

✓ 自ら意欲を持って、常にチャレンジすることを楽しむ

- ・ 週1回程度のアスレチックの時間では、子供が自ら挑戦することを重視した活動を行っている。跳び箱を跳ぶといった統一的な目標を設定するのではなく、子供が自分から、跳び箱に登る、歩く、飛び越える、などの遊びを生み出す中で、身体の様々な動きを自然に身につけることを目指している。
- ・ 教室内にアスレチックコーナーを常設し、定期的に環境構成を変えることで、日常の遊びの時間の中でも、子供たちが常に遊びを楽しむことができる。





このプログラムは、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）との協定の下、東京都の「とうきょう すくわくプログラム推進事業」として策定したものです。